

第34・35号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(13.2)	3.7	(6.4)	A B C	A	灰	45	
2	坏	(13.1)	(5.4)		A C F	A	灰	20	
3	坏	(13.8)	5.1	8.2	B C G	A	灰白	20	
4	坏		(4.3)	7.7	B C G	A	灰	60	
5	坏	12.0	3.1	5.5	B C G	A	灰	40	
6	坏		(1.1)	6.0	B C F	A	灰	55	
7	坏		(1.1)	5.4	B C F	A	灰白	90	籠記号
8	坏	(12.0)	(4.0)		B E F	A	にぶい黄橙	20	内面黒色処理
9	坏	(13.3)	3.2	(9.7)	B E F	A	にぶい黄橙	30	
10	甕	(19.6)	(3.3)		A B C	A	暗灰	15	
11	長頸瓶		(5.2)	12.2	B G	A	暗灰	25	
12	甕		(5.4)		A B	A	灰		
13	台付甕	10.7	(13.7)		B E F	A	にぶい黄橙	95	支脚転用
14	台付甕	11.6	(16.0)		B E F	A	赤褐	80	支脚転用
15	台付甕		(3.0)		B E F	A	明赤褐	55	
16	台付甕		(2.5)	(9.0)	B E F	A	暗赤褐	40	
17	甕	13.5	(11.3)		B E F	A	にぶい褐	75	
18	甕	(18.8)	(7.0)		B E F	A	赤褐	15	
19	甕		(2.0)	3.6	B E F	A	にぶい褐	40	
20	甕		(2.3)	3.8	B E F	A	褐	30	
21	甕		(2.0)	5.2	B F	A	にぶい橙	45	
22	甕	(20.5)	(25.7)		B E F	A	橙	40	
23	支脚								長さ(15.3) 幅7.6 厚さ6.9cm

に台付甕13を重ねていた。13は底面から脚台部にかけてを欠損していた。その破断面には掛け易いように再調整が施され、良く摩耗していた。覆土の状態はa～c層が天井部崩落土、d層が火床面に相当する。

床面は概ね平坦で、全体に踏み締められていた。壁はやや開き気味に立ち上がる。壁溝は東壁のみに巡らし、その幅は48～26cm、深さ12cm前後である。ピットは壁溝内に小ピットが1本検出されただけであった。覆土は概ね自然堆積を示す。

第35号住居跡は、第34号住居跡の東側に重複し、東壁と北・南壁の一部を遺存していた。規模は第34号住居跡と同規模程度と想定される。遺存した東壁部分の長さは4.3mを測る。

カマドは東壁の中央やや右寄りに設置されていた。焼土粒子、粘土粒子を多く含む暗灰褐色土によって埋め戻されていた。これにより住居使用時にカマドが別の壁に作り替えられた可能性も考えられる。カマドは壁面への掘り込みは小さく、長さ0.55m、焚口幅0.6mを測る。燃焼部は皿状に掘りくぼめ、煙道部は急傾斜で壁外に立ち上がる。

床面は第34号住居跡と同じ深さで、全体に強く踏み締められていた。壁はやや開き気味に立ち上がる。覆土はローム粒子・焼土粒子を混入した暗褐色土を主体とする。

調査時の遺物の取り上げ作業の不幸により覆土中から出土した遺物の帰属は明確ではないが、第34号住居跡ではカマドの周辺を中心に須恵器坏、土師器甕・台付甕等が出土した。また第35号住居跡では北東コーナーから須恵器坏、土製支脚等が出土した。

第255図1～7は須恵器坏である。浅身と深身の2種類が出土している。1・5は浅身の坏で、底部は回転切り離し未調整である。2点とも第35号住居跡から出土した。1は口径13.2cm、底径6.4cm、器高3.7cm、5は口径12cm、底部5.5cm、器高3.1cmを測る。2～5は深身の坏で、底部に再調整を施すものである。2は底部を欠損するため底部再調整の有無は明確でない。3は口径13.8cm、底径8.2cm、器高5.1cmを測る。底部調整は切り離し後、周辺箇所を施す。4は底径7.7cmを測り、再調整は底部周辺及び体部下端に篋削りを施す。7は底面に線刻による篋削りがある。1

～7はいずれも胎土に白色針状物質を含み、南比企産と考えられる。10・12は甕の破片である。10は口径19.6cmを測り、胎土に白色針状物質を含み、南比企産の製品である。12は頸部から肩部にかけての破片で、外面に平行叩目を施し、内面は撫でを加える。11は高台付長頸瓶の底部と考えられる。胴部外面には濃緑色の自然釉が付着する。

8は内面黒色処理を施したロクロ土師器環である。内面は細かい横方向の磨きを密に施し、炭素吸着による黒色処理を施し、光沢がある。復元口径12cmを測る。9は体部の浅い平底の土師器環である。体部中程がくびれ、口唇部は内湾する。底面に篋削りを施し、体部外面には指頭瓦痕の上に撫でを加える。復元口径13.3cm、器高3.2cmを測る。

13～22は土師器甕・台付甕を一括した。13・14の台付甕は第34号住居跡のカマドに支脚に転用されていたものである。コの字状口縁の台付甕で、13は口径10.7cm、残存高13.7cmを測る。14は口径11.6cm、残存高16cmを測る。17は胴部下半を欠損するコの字状口縁の小型甕と推定される。口径13.5cmを測る。第34号住居跡のカマド手前から出土した。18は復元口径18.8cmのコの字状口縁の甕で、口縁部外面には木口状工具の引き当てによる沈線状の調整痕を残す。22の甕は第34号住居跡のカマド袖部を中心に出土した。コの字状口縁を呈し、胴部外面には煤が付着する。口径20.5cm、残存高25.7cmを測る。23は第35号住居跡の北東コーナーから出土した土製支脚である。截頭円錐形を呈し、多面体に面取りされ、上端部は2次被熱により赤色化し、非常に脆くなっていた。

土器の様相には遺物取り上げ時のミスがたたり、新旧の遺物が混在してしまった。特に須恵器環には底部再調整を施す深身の環と、底部未調整の浅身の環が見られる。前者は概ねHVI期に比定され、後者はHVII期前半まで下がるものと考えられる。また須恵器のほとんどが南比企産によって占められ、また皿や高台付碗等の器種が伴わないことから、今回の調査では最も古い段階の9世紀中葉前後に位置づけられる。

第36号住居跡（第256・257図）

調査区南側のI-13・14グリッドに位置する。北東へ約4m離れて平安時代に属する第37号井戸が存在する。平面形態は南北に長い長方形を呈し、長径4.05m、短径3.17m、深さ0.45mを測る。カマドは西壁と北壁の2か所に設置されていた。主軸方向は長軸方向を基準とすればN-42°Eを示す。

カマドAは西壁のほぼ中央に構築されたもので、カマドの作り替えによって袖部は壊され、壁外に掘り込まれた煙道部のみを残していた。遺存した煙道部分の長さは0.65m、最大幅0.55mを測り、主軸方向はN-48°Wを指す。煙道部は緩やかに立ち上がり、壁外にのびる。覆土はローム粒子及び焼土粒子を多量に含む赤褐色土を主体に埋め戻されていた。

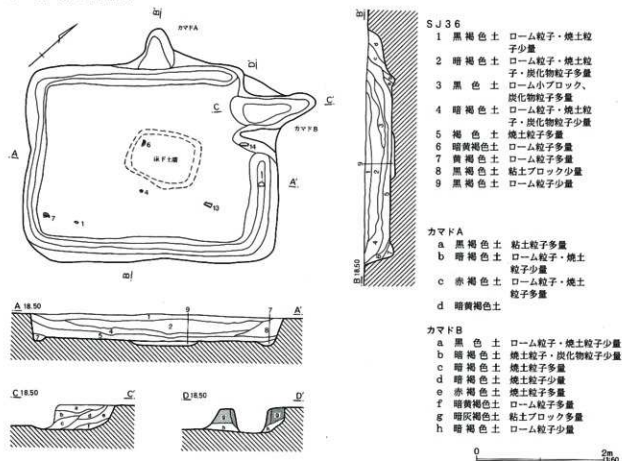
カマドBは北壁の北西コーナー寄りに設置されていた。長さ1.35m、焚口幅0.5mを測り、主軸方向はN-42°Eである。袖部を良好に残し、灰白色粘土を用いて構築されていた。袖部の内壁面は被熱により赤色化していた。燃焼部の掘り込みは浅く、煙道部は急角度で壁外へ立ち上がる。覆土はc～e層から天井崩落土、f層が掘り方埋土と推定される。

床面は概ね平坦で、壁溝はカマドBの部分を除いてほぼ全周する。壁溝は幅55～25cm、深さ10cm前後である。ピット等は検出されなかったが、床面の中央に長径1.12m、短径0.9m、深さ0.1mの方形の床下土壌が確認された。床下土壌はローム粒子を含む黒褐色土で埋め戻され、粘土や焼土等は確認されなかった。

出土遺物は須恵器環・高台付碗、土師器環・甕・台付甕、台石、棒状礫等が出土している。南側コーナーから須恵器環1、高台付碗7、床下土壌周辺から環4・5、カマドBの袖部から棒状礫14、東側コーナー付近から台石13がそれぞれ出土した。

第257図1・3は浅身の環で、底部から内湾して立ち上がり、口唇部で短く外反する。口唇部は玉縁状に肥厚する。1は口径11.7cm、底径5.3cm、器高3.5cmを測る。2・4は深身のものである。2は口径12.7cm、底径5.5cm、器高4.5cmを測る。5・6は底部のみの破片

第256図 第36号住居跡



のため全体の器形は明確でないが、底径が大きいことから椀になる可能性もある。1～6は南比企窯群産の製品と考えられる。7は高台付椀である。高台は径が大きく、ハの字状に短く開くものと推定される。体部は内湾して立ち上がり、口唇部で緩やかに外反する。口唇部は玉縁状に肥厚する。胎土に片岩粒子を含み、器形の特徴から末野窯跡群産の製品と推定される。

8は浅い丸底風の土師器環である。底部から外傾して立ち上がり口縁部に至る。底部外面には篋削りを施す。口径13.2cm、器高3.4cmを測る。9～11はコの字状口縁の土師器甕である。12は台付甕の脚台部である。13は長さ15.4cmの扁平な礎で、半分は割れている。表面には擦底が残り、用途は明確ではないが台石として利用されたものと推定される。14は長さ15.3cmの棒状の礎である。用途は明確でない。須恵器環の様相からHVM期を中心とした時期に比定される。

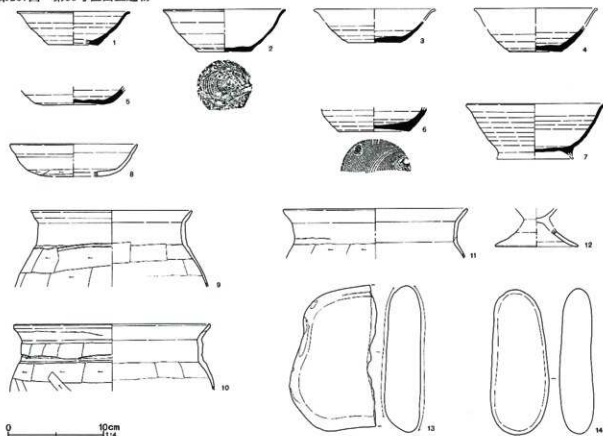
第37号住居跡 (第258図)

調査区南側のI・J-11・12グリッドに位置する。第8号溝及び第3号柵列と重複し、北壁の大半は擾乱によって壊されていた。平面形態は南北に長い長方形を呈する。規模は長径3.85m、短径3.1mを測り、深さは0.16mと浅い。カマドは遺存した壁体部分には確認されなかった。主軸方向は南壁を基準に採れば、N-52°-Eを示す。

床面は緩やかな起伏があり、全体に柔らかい。壁溝は無く、ピット2本が検出された。ピット1は南西コーナー寄りに位置し、覆土中に焼土粒子が少量混入していることから炉跡と考えられる。ピット2は北東コーナー寄りにあり、土層の観察では柱痕は確認されず、住居に伴うかは明らかでない。

出土遺物は須恵器皿・高台付椀、土師器椀・甕のほか軽石、磨石等が出土し、ピット1の上面からまと

第257図 第36号住出土遺物



第36号住居跡出土遺物観察表

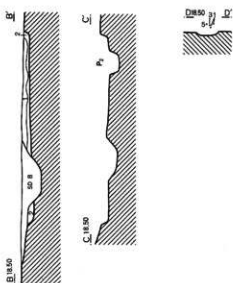
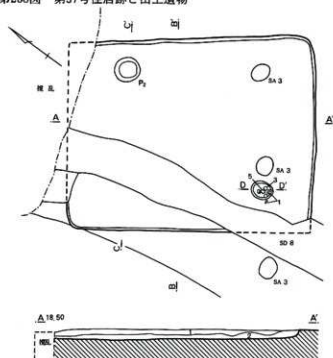
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	鉢	(11.7)	3.5	(5.3)	ABC	A	灰	20	
2	鉢	(12.7)	4.5	5.5	ABC	A	灰白	30	
3	鉢		(2.2)	5.5	BC	A	にぶい赤褐色	25	
4	鉢	(12.8)	(4.6)	5.5	AB	A	灰	20	
5	鉢		(1.9)	6.4	ABC	A	灰	25	
6	鉢		(2.5)	7.4	BC	A	灰	45	
7	高台付椀	14.4	(5.5)		BGI	A	オリーブ灰	65	
8	鉢	(13.2)	3.4	(5.2)	BF	A	褐	40	
9	甕	(16.7)	(8.0)		BEF	A	褐	10	
10	甕	(20.5)	(7.0)		BEF	A	にぶい橙	15	
11	甕	(19.3)	(5.3)		BEF	A	黄橙	20	
12	台付甕		(1.9)	(8.7)	BEF	A	にぶい黄橙	30	
13	磨石								長さ15.4 幅(9.2) 厚さ3.8cm
14	棒状罐								長さ15.3 幅6.2 厚さ3.5cm

まって出土している。

第258図1は須恵器皿で、底部は未調整である。2は高台付椀の底部片である。高台はハの字に短く開き、端面は浅くくぼむ。色調はにぶい黄褐色を呈し、酸化焰焼成に近い焼きである。1・2は胎土や器形等の特徴から末野産と推定される。3は高台付椀としたが、

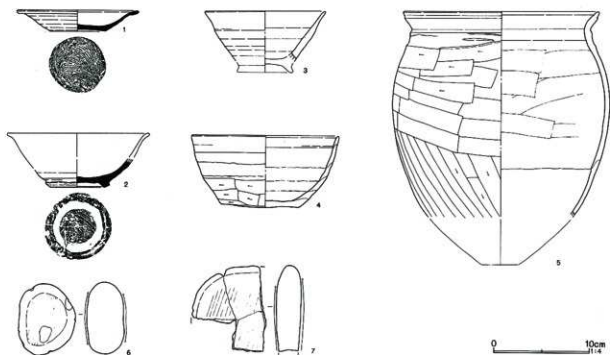
本来の器形については明確でない。ロクロ整形であるが、酸化焰焼成に近く、色調・胎土の特徴が須恵器と異なっているため、ロクロ土師器とした。4は土師器の鉢である。底面及び体部下半に篋削りを施し、内面は光沢のある撫でを施す。内外面に粘土紐の積み上げ痕を残す。5の土師器甕は、コの字状口縁の形態が崩

第258図 第37号住居跡と出土遺物



SJ 37

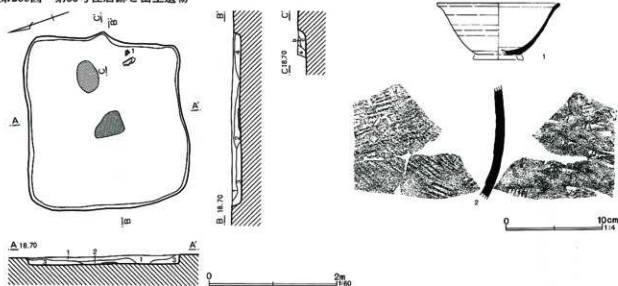
- 1 黒褐色土 ローム粒子・炭化物粒子少量
- 2 黄褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量



第37号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	皿	12.6	2.2	5.95	FG I	A	灰	65	
2	高台付碗		(3.0)	(5.3)	FG I	A	にぶい黄橙	55	
3	高台付碗	(12.6)	(5.3)		E F	A	浅黄	15	酸化焙焼成
4	鉢	(15.5)	7.5	8.1	AB F	A	暗褐	30	
5	罎	(20.5)	(21.5)		BE F	A	にぶい黄	35	
6	軽石								長さ7.5 幅6.2 厚さ3.9cm
7	磨石								長さ(9.0) 幅(7.7) 厚さ2.2cm

第259図 第38号住居跡と出土遺物



S J 3 8

- 1 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子少量
- 2 褐色土 焼土粒子少量、粘土ブロック多量
- 3 暗黄褐色土 ローム粒子多量
- 4 褐色土 焼土粒子多量

カマド

- a 暗赤褐色土 焼土ブロック多量
- b 暗褐色土 ロームブロック・焼土粒子少量
- c 暗黄褐色土 ローム粒子・焼土粒子少量

第38号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	高台付椀	(12.6)	6.0	(5.2)	B F I	A	赤褐	30	
2	甕		(12.1)		A B F	A	暗灰		

れ、胴部の器壁が厚く、口唇部が肥厚した新しい時期のものである。6は磨石として用いられたと考えられる軽石で、表面には擦痕が残る。7は偏平な円碟の破片で、表面に擦痕が見られる。磨石として使用されたものであろう。

須恵器には南比企産が含まれず、末野産と推定される製品が主体を占めている。また土師器甕のコの字状口縁が大きく崩れ、退化し始めていることから時期的には新しく位置づけられる。

第38号住居跡 (第259図)

調査区南端のG-13、H-12・13グリッドに位置する。平面形態はやや歪んだ方形で、規模は長径2.77m、短径2.68m、深さ0.16mの小型の住居である。主軸方向はN-107°-Eを示す。

カマドは東壁のほぼ中央に構築され、壁への掘り込みは浅い。焚口幅53cmを測り、燃焼部は床面をほとんど掘り込んでいなかった。袖部はまったく遺存してい

ない。a・b層が天井崩落土に相当する。

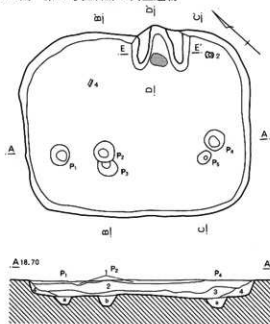
床面は全体に柔らかく、壁溝・ピット等の付属施設は検出できなかった。ただし、カマド前面に径約50cmの範囲に焼土が薄く堆積していた。床面への明確な掘り込みがないことから、カマドから掻き出されたものと考えられる。また住居の中央部には径約52cmの範囲に灰白色粘土が床面上に広がっていた。その性格については明確でない。

遺物は、カマド周辺から須恵器高台付椀・大甕破片が出土しただけである。第259図1はやや深目の高台付椀である。高台は剝離している。胎土に片岩・赤色粘土を混入しており末野産と考えられる。時期的には9世紀末葉まで下がるものと推定される。

第39号住居跡 (第260図)

調査区南西端のI・J-10グリッドを中心に位置する。平面形態はコーナーに丸みをもつ長方形で、規模は長径3.72m、短径2.92m、深さ0.2mを測る。主軸

第260図 第39号住居跡と出土遺物

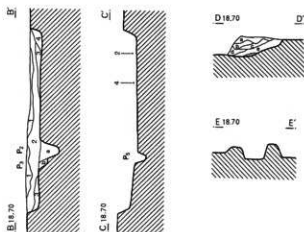


S J 39

- 1 黒色土 ローム粒子少量
- 2 黒褐色土 ローム粒子少量
- 3 暗褐色土 ローム小ブロック・ローム粒子多量
- 4 暗黄褐色土 ローム粒子少量



0 10cm
1/4



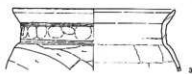
カマド

- a 黒褐色土 ローム粒子少量
- b 暗赤褐色土 焼土粒子少量
- c 赤褐色土 焼土粒子少量
- d 黒色土 焼土粒子少量
- e 暗黄褐色土

ピット

- a 黒色土 ローム小ブロック多量
- b 暗褐色土 焼土粒子少量

0 2m
1/20



第39号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	高台付碗	(14.3)	(3.7)		AG	A	暗青灰	30	
2	高台付碗	14.0	6.5	5.6	B F I J	A	灰	95	
3	甕	(17.0)	(6.5)		B E F	A	明褐	20	
4	甕	(18.0)	(4.1)		B E F	A	にぶい黄橙	25	

方向はN-48°-Eを指す。

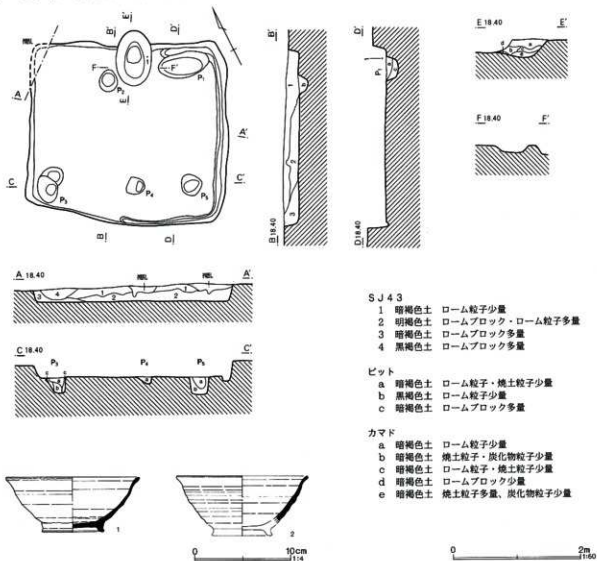
カマドは北壁の中央やや東寄りに設置され、規模は長さ0.72m、焚口幅0.55mを測る。両袖を残し、比較的遺存状況は良好であった。袖部はロームを掘り残して基部を構築していた。燃焼部の掘り込みは浅く、火床面と考えられる焼土面が良好に残る。壁への掘り込みはわずかである。覆土はa層が住居流入土、b・c

層が天井崩落土と推定される。

床面は緩やかな起伏があり、壁溝は検出されなかった。ピットは合計5本確認され、いずれも覆土の状況から住居に伴うものと考えられる。直径30cm、深さ20cm前後と全体に浅く、主柱穴とは考えられない。

遺物は須恵器高台付碗、土師器甕が出土した。第260図1は口縁部破片からの復元で高台付碗と推定される。

第261図 第43号住居跡と出土遺物



第43号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	高台付椀	(13.9)	5.8	6.4	B F I	A	褐	30	
2	高台付椀	(13.7)			B F I	A	灰	15	

2は高台付椀の深身のタイプで、高台は径が小さく、ハの字に開き、端面に凹線を巡らす特徴をもつ。底部内面には重ね焼き痕が見られる。カマド右脇出土。3・4はコの字状口縁の甕である。4は床直出土。

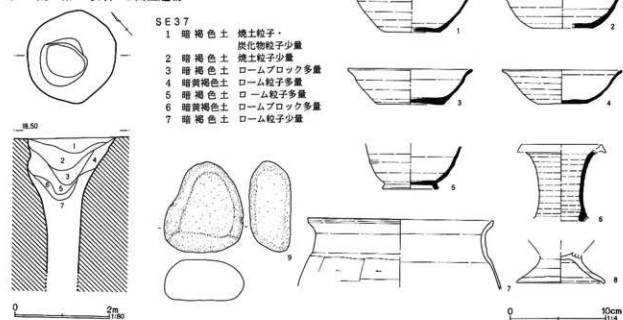
2の須恵器高台付椀の胎土には片岩粒が含まれ、器形の特徴から末野産と推定される。时期的には9世紀後半前後に位置づけられる。

第43号住居跡 (第261図)

調査区南側のK-10、L-10・11グリッドに位置する。平面形態は方形を呈し、長径3.2m、短径2.9m、深さ0.28mを測る。主軸方向はN-26°-Eを示す。

カマドは北壁のほぼ中央に設置され、長さ1.35m、焚口幅0.55mを測る。燃焼部は床面を鍋底状に掘り込み、奥壁部分は急傾斜で立ち上がる。袖部は遺存していなかった。覆土の観察によればa～d層が天井崩落土、e層が火床面に相当する。

第262図 第37号井戸と出土遺物



第37号井戸出土遺物観察表

遺構	番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
SE-37	1	坏	(13.0)	4.1		BCF	A	乳白	20	
	2	坏	(12.8)	2.8		ABC	B	灰	40	
	3	坏	(13.0)	3.7		ABC F	B	褐	55	
	4	坏	12.6	3.6	5.3	ABC	A	暗灰褐	70	
	5	高台付碗	(4.7)	5.8		ABC	A	暗灰	40	南比企産
	6	長頸瓶		(7.5)		ABC	A	暗灰	40	南比企産 内外面降灰
	7	甕	(19.7)	(7.2)		BEF	A	暗褐	30	
	8	台付甕	(3.2)	9.2		BEF	A	橙褐	90	
	9	磨石								長さ7.2 幅6.3 厚さ3.3cm

床面は概ね平坦で全体に堅く踏み締められていた。壁溝は北壁のカマド右脇から南壁にかけて巡り、幅32~8cm、深さ10cm前後である。ピットは合計5本検出された。カマド右脇のピット1は長径82cm、短径33cm、深さ20cmの楕円形を呈し、貯蔵穴と考えられる。他のピットは直径30cm前後、深さ30~20cmを測る。ピット3・5は、柱痕が確認された。

出土遺物は須恵器高台付碗が出土しただけである。第261図1は短い高台が付き、口唇部は玉縁状に肥厚する。見込みに重ね焼き痕が見られる。色調は褐色で、酸化焰焼成に近い焼き上がりである。体部が比較的浅いことから高台付坏に分類した方が良いかもしれない。カマド内出土。2は口縁部の破片からの復元で、高台付碗と推定される。内面は良く摩耗している。

これらは胎土・器形等の特徴から末野窯の製品と推定され、第39号住居跡と同様、新しく位置づけられる。

3. 井戸跡

第37号井戸 (第262図)

I-14グリッドに位置し、第36号住居跡の北東側に所在する。平面形態は円形を呈し、長径1.92cm、短径1.85cm、深さ3.50m以上を測り、断面漏斗状である。覆土上層には、焼土・炭化物粒子、ロームブロックが含まれおり、人為的な埋戻しが想定される。

遺物は覆土上層から須恵器坏・高台付碗・長頸瓶、土師器甕・台付甕、磨石等が出土している。須恵器は南比企産のものが主体を占め、時期的にはHVI期に比定される。周辺の住居跡とはほぼ同時期であろう。

IX. 中・近世・その他の時代の調査

1. 中・近世の調査の概要

今回の調査で検出された中・近世の遺構は、掘立柱建物跡10棟、櫓列12条、溝跡53条、土壌墓1基、土壌196基、井戸跡50基、ピット多数などである。

調査区内は農事試験場の建設に伴い雑壇状の造成が行われ、旧地形が大きく改変されていた。そのため上位段丘面を中心に広がっていた中・近世の遺構の中には削平されてしまった遺構も少なくないと思われる。また遺構に伴う出土物の量は全体に少なく、詳細な帰属時期を確定し得るものはあまり多くない。ここでは代表的な遺構・遺物を取り上げて当該時期の概要についてまとめてみたい。

検出された中世の遺構は、調査区北側の低位段丘面を中心に展開していた。第12号掘立柱建物跡は3間×2間の南北棟である。その周辺には多数のピットが確認されており、この他にも複数の建物が存在したことが予想される。また建物群に付属する井戸が数基検出されている。井戸から出土した遺物には13世紀代の常滑産甕、片口鉢、捏鉢等の陶器類が見られ、建物群の凡その年代を推察することができる。

溝跡はB区の調査で確認された第23・39号溝が調査区内を西から東へ走行しており、それに南から合流する第43号溝も本来は同一の溝と考えられる。また第23号溝はB区の中で南へ直角に屈曲していることから南側の状況は不明であるが、北辺長約95mのやや不整形な方形区画の存在が想定される。第23号溝からは12世紀後半の常滑産甕、13世紀前半の龍泉窯系青磁碗等が出土している。

この他に第73号溝は調査区内で鍵の手に折れ曲がる箱葺研堀で、その形態から中世の溝と考えられる。上幅3.7m、深さ1.87mを測る規模の大きなもので、中世の館との関連性があるものと思われる。

近世の遺構には、掘立柱建物跡、櫓列、溝、土壌墓、土壌、井戸等が検出されている。これらの遺構は主に緩斜面部から上位段丘面にかけて分布している。

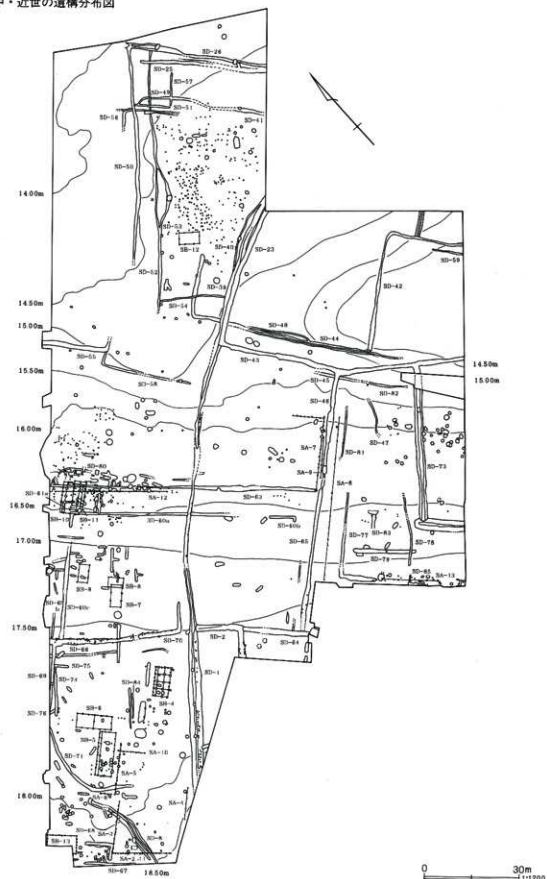
掘立柱建物跡は上位段丘面の平坦地を中心に9棟が検出された。中心的建物の第4号掘立柱建物跡は西庇をもつ4間×2間の総柱建物で、その北側には庶務処理用の土壌と推定される3基の土壌が隣接している。また調査区南端には第5・6・13号掘立柱建物跡、第2～6・10・11号櫓列、第41・43・44号井戸等が計画的に配置された状況が窺われた。なお、調査区中央に位置する第7～11号掘立柱建物跡は、良好な出土遺物がなく、所産時期は明確にし得ない。

他に注目されるものとしてA区の調査時に確認された箱葺研堀の第1号溝の内部から土壌墓が検出されたことが挙げられる。屋敷地内における単独墓としての特殊性が今後問題となるものと思われる。また17世紀後半の型紙摺の香炉が副葬されていたことから第1号溝の溝として機能していた下限年代をおさえることができる。現状では第1号溝の掘前時期は明確でないが、第2次調査で検出された構堀と軸線が概ね一致することから両者の密接な関連性が窺われ、溝の形態的特徴から掘前時期が中世に遡る可能性も考えられる。

さらに、前述の掘立柱建物群を取り囲むように二重に方形に巡らされたと推定される第60・63号溝が検出された点も特筆されよう。その西辺はA区第7・9号溝が対応しており、東辺長約85m、北辺長約125mの方形区画が復元される。この他にもL字形に屈曲した区画溝数条が検出されており、屋敷地の区画割の変遷の解明が今後の大きな課題と言えよう。

遺物には漆椀、焼壺蓋、染付丸碗・皿、有耳壺、天目茶碗、茶入、建水、香炉、仏飯器、銅皿、摺鉢、盤、煙硝摺、かわらけ、灯明皿、べっ甲巻、硯、銅製鍔金具、棒状銅製品、銅線、鉄釘、包丁、刀子、煙管、古銭、鉄砲玉、曲物、碁石、土鈴、砥石、磨石、貝殻等の多種多様なものが出土している。出土遺物の様相から17世紀後半から18世紀前半を中心とした時期のものが主体を占め、一部18世紀後半から19世紀に下る陶磁器類等も出土している。

第263図 中・近世の遺構分布図



2. 掘立柱建物跡

第4号掘立柱建物跡 (第264図)

調査区南側のK・L-15・16グリッドに位置し、平安時代の第31号住居跡と重複し、それを切って構築されていた。北側1.6mには多量の近世遺物を出土した第82号土壌か建物に沿うように隣接する。また西約14mには第5・6号掘立柱建物跡が所在し、第5号掘立柱建物跡とは主軸方向を揃えており、計画的な配置状況が窺われる。

西庇をもつ4間×2間の総柱建物で、身舎の規模は桁行9.2m、梁行4mを測り、庇の出は0.8mである。南北棟建物で主軸方向はN-50°-Eを示す。

柱間寸法は桁行2.3m、梁行2m等間で、各柱穴は均等に配されていた。柱穴は円形のものも多く、大きさは径90~30cm、深さ85~10cmで掘り込みは全体にしっかりしている。P25~29・34は補助柱と考えられ、身舎の柱穴に比べ、径が小さく、深度も浅い。庇は半間毎に9本の柱穴が並び、身舎の柱筋に乗るものは掘り込みが大きい。

柱痕は19本の柱穴で確認された。炭化物・粘土粒子を少量含む灰褐色土の第1層が柱痕に相当し、掘り方埋土は暗褐色土・暗黄褐色土を互層にして突き固めていた。柱径は25~20cm前後を測る。

覆土の状況や建物構造から近世の建物と考えられ、主軸を同じくすることから第5号掘立柱建物跡との同時存在が想定される。

なお、身舎の北西隅に位置するP30・31の2本には底面に扁平な河原石が根石として据え置かれていた。P30はP12を切っており、建物よりも新しい。両者の間隔は2.4mを測り、延長線上に柱穴列が延びないことから門の可能性も考えられる。

第5号掘立柱建物跡 (第265・266図)

調査区南側西寄りのJ-12、K-12・13、L-13グリッドに位置する。北東側にはL字形に第6号掘立柱建物跡が配置されていた。第5号掘立柱の棟通りと第6号掘立柱の東妻柱列がほぼ揃う。両者の間隔は0.6mと接近していることから、同時共存は難しい。

西庇をもつ7間×2間の南北に長い側柱建物で、今回の調査では最大規模のものである。身舎の規模は桁行14m、梁行4.4mを測り、庇の出は0.8mである。主軸方向はN-50°-Eを示す。なお、第5・6号構列は建物に対してL型に配置されていることから同時存在していたものと推定される。

柱間寸法は、桁行側ではやや不揃いで、P1~6の間は1.9m、P6~8の間は2.3mを測り、梁行は2.2m等間である。また身舎部分には半間毎に補助柱を置き、P13とP14の柱間は間隔が開く。P18・19は棟通りの線上に乗り、間仕切り柱の可能性もある。庇柱は半間毎に13本の柱穴列が並び、P31とP32の間が欠落するため、入口の存在が想定される。

柱穴は円形のものも多く、大きさは径100~18cm、深さ60~10cmを測り、掘り込みはしっかりしている。一方、補助柱は全体に規模が小さく、深度も浅い。柱穴の覆土の観察によれば、重複する土壌の多くはこの建物跡を切って構築されていた。柱痕あるいは抜き取り痕はロームブロックを多量に含んだ暗灰色土の第1層が相当し、第2~5層は掘り方埋土である。

出土遺物は柱穴覆土中から第266図1のかわらけと2の染付の丸碗が出土しただけである。1の底面には「二」と考えられる墨書が認められた。破断面にも墨が付着していることから、破砕後に書かれたものと考えられる。2は呉須による染付で園線と草花文を描く。壘付けには砂が付着している。

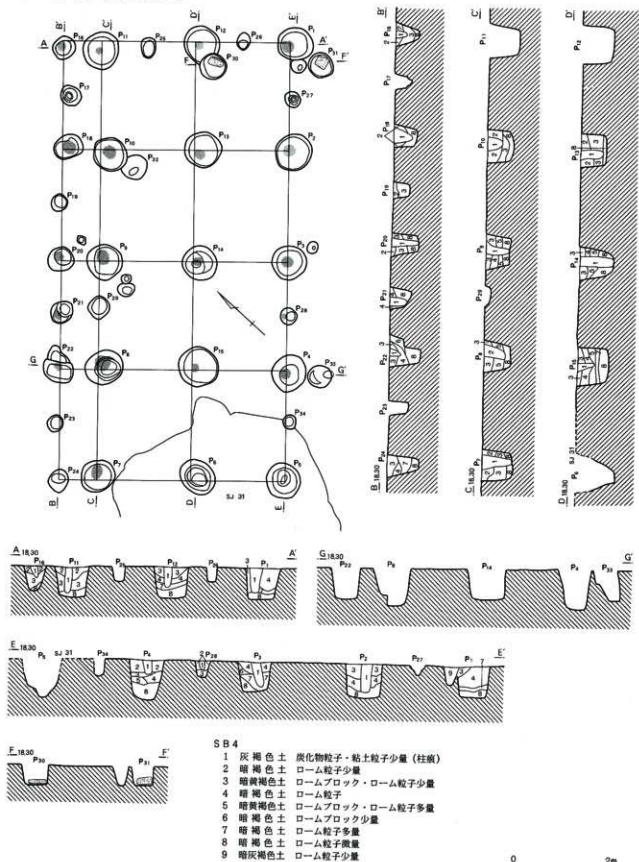
建物構造の特徴及び柱穴覆土の状況、出土遺物等から近世に比定される。

第6号掘立柱建物跡 (第267図)

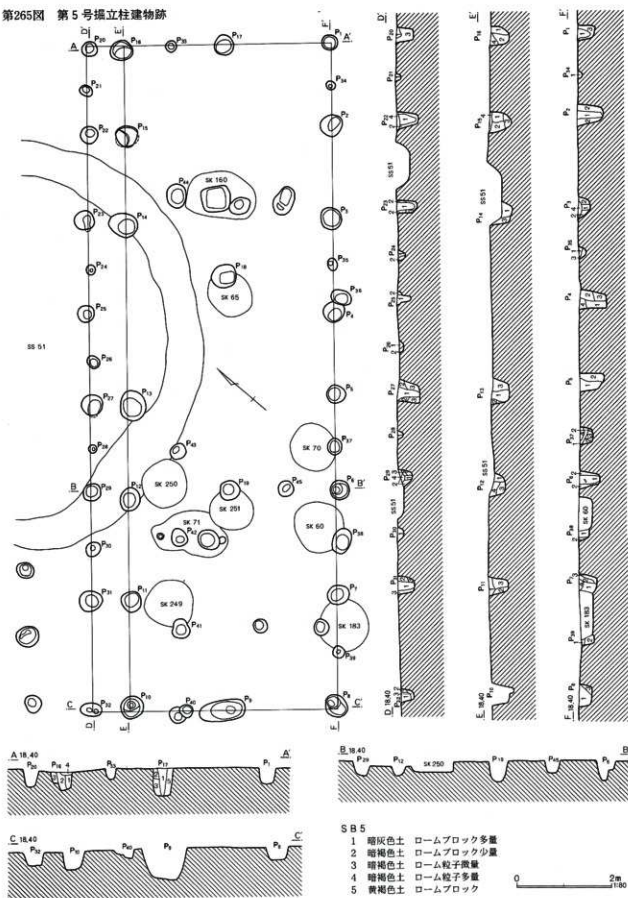
調査区南側西寄りのK-13、L-12・13、M-13グリッドに位置する。南西側には第5号掘立柱建物跡がL字形に配される。6間×2間の南北に長い側柱建物で、棟通りの中央に間仕切りの柱穴P17をおく。規模は桁行11.4m、梁行4.2mを測る。主軸方向はN-40°-Eを示す。

柱間寸法は桁行1.9m、梁行2.1m等間で、各柱穴は均等に配置されている。

第264図 第4号掘立柱建物跡



第265図 第5号掘立柱建物跡

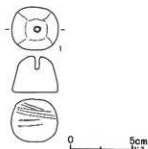


第266図 掘立柱建物跡出土遺物

SB 5



SB 7



掘立柱建物跡出土遺物

遺構	番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
SB-5	1	かわらけ	(8.60)	1.90	(5.40)	BEF	A		50	墨書の墨が割れ口にも付着
	2	丸甕	11.40	5.90	4.60		A		40	典須使用 肥前産、17世紀後半
SB-7	1	楕状石製品								外径3.7 孔径0.5 厚さ3.0cm

柱穴は円形のもが多く、大きさは径80～30cm、深さ70～25cmで掘り込みは全体にしっかりしている。柱穴覆土の観察によれば、ローム粒子・灰色ブロックを少量含む暗褐色土の第1層が柱痕に相当する。

遺物は検出されていないが、配置状況から第5号掘立柱建物跡をはじめとして、第5・6・10号櫛列と密接な関連が窺われ、近世の建物と推定される。

第7号掘立柱建物跡 (第268・266図)

調査区南側西寄りのN・O-16グリッドに位置する。第8号掘立柱建物跡と重複しているが、切り合い関係は明らかでない。北約9mに桁行の柱筋を同じくする第9号掘立柱建物跡が所在し、この3棟でひとつのグループを構成している。3間×1間の東西棟建物で、規模は桁行6.9m、梁行3.4mを測る。主軸方向はN-45°-Wを示す。

柱間寸法は桁行側ではやや不揃いで、P1～3の間は2.45m、P3～4の間はやや狭く2mである。

柱穴は円形のを基調とし、大きさは径68～22cm、深さ40～10cmと全体に小規模である。南側柱筋のP1～3は底面が二段掘りとなっていた。覆土の状況は良好でないが、ローム粒子を少量含む黒褐色土の第1層が柱痕に相当する。

出土遺物は柱穴覆土内から第266図1の凝灰岩製の楕状石製品が出土した。頂部に孔径0.5cmの円孔を開

け、その部分に吊り下げのための部品(頭部がリング状のものか)を差し込んだものと考えられる。側面は良く研磨され、底面は平らで、製作時の擦痕が見られる。その用途は明確でないが、天秤等の衡器の楕の可能性がある、類例は中世に属するものが多い。建物の年代は遺物の様相や柱穴の規模及び覆土の状況等を考え合わせ中世に比定しておきたい。

第8号掘立柱建物跡 (第268図)

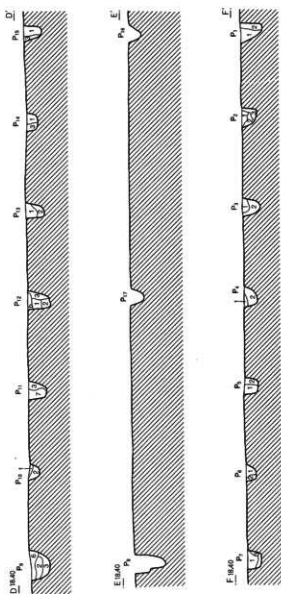
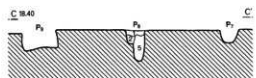
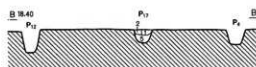
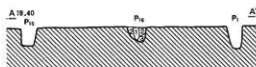
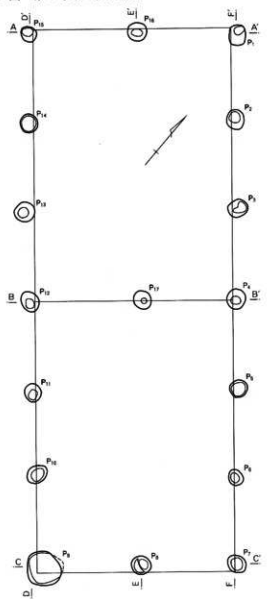
調査区南側西寄りのN・O-16グリッドに位置する。第7号掘立柱建物跡と重複しているが、先後関係は明確でない。また北西隅のP7は第179号土壌に切られ、縄文時代のTビットである第180号土壌を切っていた。南北に長い2間×2間の側柱建物で、今回検出された建物の中では最も小さい。規模は桁行4.8m、梁行3.2mを測る。主軸方向はN-40°-Wを示す。

柱間寸法は桁行2.4m、梁行1.6m等間に復元される。北妻柱列の中間柱は欠落していた。

柱穴は小規模で円形のもが多く、大きさは径38～25cm、深さ60～25cm前後である。規則的に配置され、柱筋はほぼ芯々を通る。柱穴の覆土第1層が柱痕に、第2・3層は掘り方埋土にそれぞれ相当する。

出土遺物は検出されなかったが、第7号掘立柱建物跡と近接した時期の所産の可能性が強く、柱穴の規模や覆土の状態等から中世の建物と考えられる。

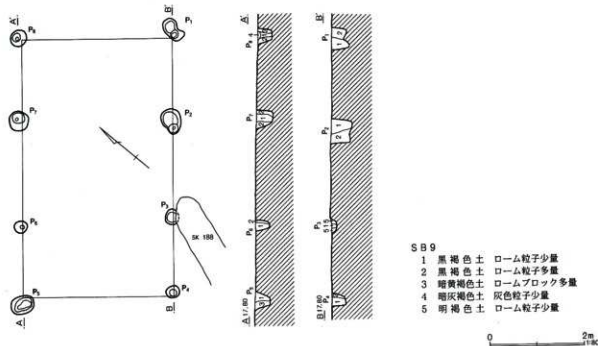
第267図 第6号掘立柱建物跡



S B 6

- | | | |
|---|-------|-------------------|
| 1 | 暗褐色土 | ローム粒子・灰色ブロック少量 |
| 2 | 暗黄褐色土 | ロームブロック多量 |
| 3 | 暗褐色土 | ロームブロック・ローム粒子少量 |
| 4 | 暗褐色土 | ローム粒子多量、灰色粒子少量 |
| 5 | 褐色土 | ローム粒子少量 |
| 6 | 暗褐色土 | ローム粒子多量 |
| 7 | 暗褐色土 | ロームブロック多量、炭化物粒子少量 |





柱間寸法は桁行側はやや不揃いで、P1・2の間は1.8m、P2・3の間は2m、P3・4の間は1.6mをそれぞれ測る。

柱穴は円形あるいは楕円形を呈し、大きさは径54~25cm、深さ45~16cm前後を測る。このうちP3・6は規模が小さく、深度も浅い。柱穴覆土には柱痕あるいは抜き取り痕が確認されている。第1層のローム粒子を少量含む黒褐色土が柱痕と推定される。柱径は20~15cm前後である。

遺物は検出されなかったが、第7号掘立柱建物跡と主軸方向が近く、その北東柱列と本建物跡の南東柱列がほぼ同一線上に揃い、同時存在の可能性が強い。

第10号掘立柱建物跡 (第270図)

調査区中央西寄りのQ-17、R-16-18グリッドに位置する。第11号掘立柱建物跡と重複しているが、先後関係は明確にできなかった。また第61・63号溝、第123・210号土壌等とそれぞれ重複しており、覆土の観察によればそれらに切られていた。3面に庇をもつ4間×2間の大型建物である。北側は第44号墳と重複しているため、精査を行ったが庇は確認できなかった。

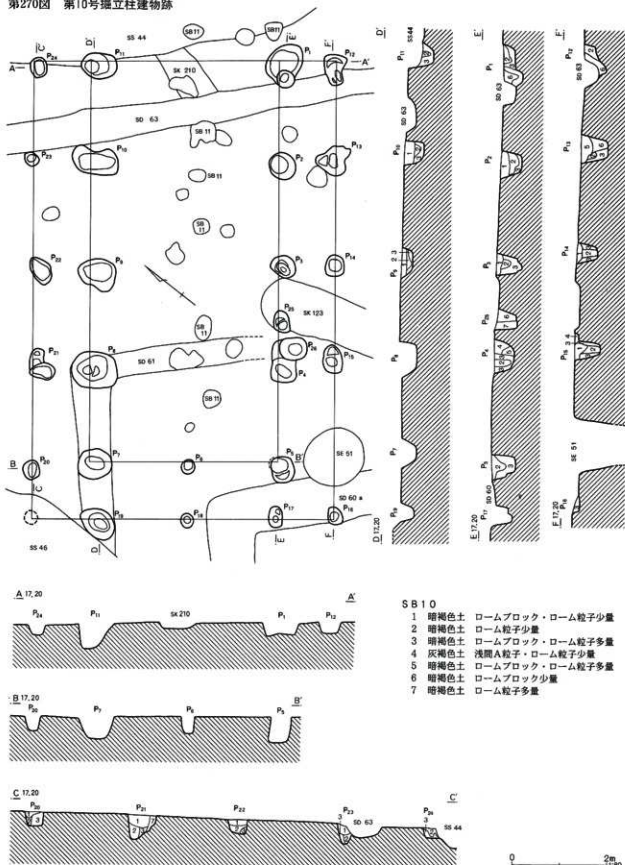
身舎の規模は、桁行8.4m、梁行4mを測り、庇の出は1.2mである。主軸方向はN-52°-Eを示し、第11号掘立柱建物跡とはほぼ同じである。

身舎の柱間寸法は桁行2.1m、梁行2m等間である。北側妻の柱間柱は第210号土壌との重複により、欠落していた。柱穴は規則的に配置され、柱筋は概ね芯々を通っている。

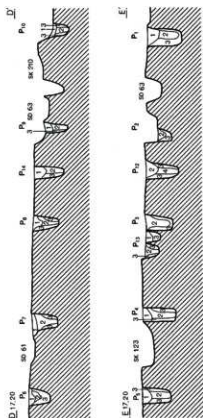
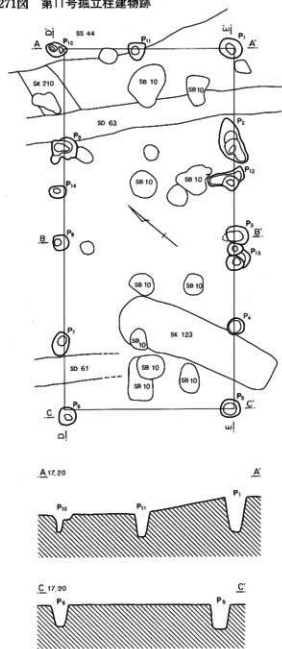
身舎の柱穴は、規模の大きな円形あるいは楕円形が多く、大きさは径105~30cm、深さ58~23cmで掘り込みは全体にしっかりしている。庇柱は全体に径が小さく、深度も浅いものが多く、第51号井戸と第46号墳との重複により一部欠けている。柱穴覆土には柱痕あるいは抜き取り痕が確認された。第2層のローム粒子を少量含む暗褐色土が柱痕に相当する。また掘り方埋土の第4層中に天明3年(1783)に噴火した浅間A軽石を含み建物の年代の上限を知ることができる。

出土遺物は柱穴覆土中から埴輪、須恵器、かわらけ、貝殻等が検出された。混入品が多く、遺構に伴う遺物は図示できなかった。建物の年代は柱穴覆土の状況や建物構造の特徴から近世と推定される。

第270図 第10号掘立柱建物跡



第271図 第11号掘立柱建物跡



- SB 11
- 1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子少量
 - 2 暗褐色土 ローム粒子少量
 - 3 暗褐色土 ローム粒子多量
 - 4 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量



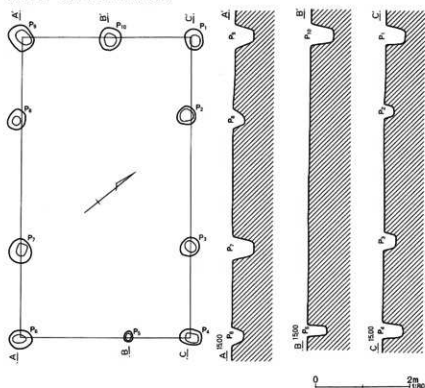
第11号掘立柱建物跡 (第271図)

調査区中央西寄りのQ-17、R-17・18グリッドに位置する。第10号掘立柱建物跡と重複しているが、切り合い関係は明確にできなかった。また第61・63号溝、第123・210号土壌等の遺構と重複しているが、土層断面の観察ではそれよりも古く位置づけられる。南北に長い4間×2間の側柱建物である。規模は桁行7.6m、梁行3.6mを測るが、柱間隔が不揃いな箇所と

欠落する柱が見られる。主軸方向はN-52°-Eを示し、第10号掘立柱建物跡と主軸を同じくすることから、近接した時期の所産であろう。

柱間寸法は、桁行側はやや不揃いで桁行1.9m、梁行1.8m等間に復元される。北妻柱列のP11は棟持ち柱とするには、位置的に西側に片寄っている。また南妻柱列の中間柱は欠落していた。ピット12・14は補助柱と考えられる。

第272図 第12号掘立柱建物跡



柱穴は円形が多いが、楕円形や不整形を呈するものも見られた。規模は径102~26cm、深さ76~30cm前後で、掘り込みは全体に堅固である。柱穴覆土には柱痕または抜き取り痕と思われる痕跡が確認された。柱痕はローム粒子を少量含む暗褐色土の第2層に相当し、掘り方埋土はローム粒子を多量に含む暗褐色土の第3層である。柱径は15~20cm前後に復元される。

遺物は検出されなかったが、柱穴の規模及び覆土の状況などから見て近世の所産と推定される。

第12号掘立柱建物跡 (第272図)

調査区北側低位面のU-25・26、V-25グリッドに位置する。後述するように周辺には多数のピット群が存在しており、これ以外にも建物跡や柵列等の遺構が存在していたと推定されるが明確にできなかった。また東側へ約30mほど隔ててB区第2・3号掘立柱建物跡が存在している。南北に長い3間×2間の側柱建物で、規模は桁行6.3m、梁行3.6mを測る。主軸方向はN-50°-Wを示す。

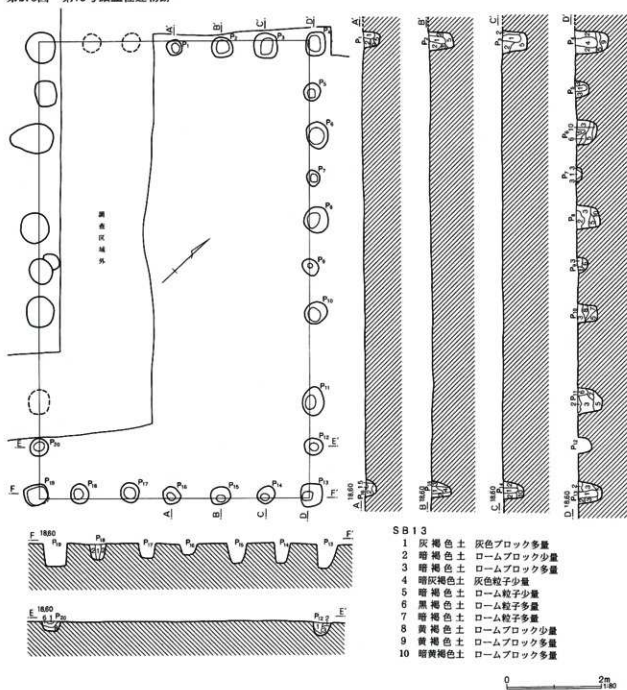
柱間寸法は桁行側はやや不揃いで、P1・2、P3・4の間は1.8m、P2・3の間は2.7mを測り、基本的には桁行2.1m等間に復元される。梁行は北側は1.6m等間であるが、南側のP5は大きく東に片寄る。各柱筋は全体に良く通っている。各柱穴は円形ないし楕円形のものが多く、大きさは径55~19cm、深さ32~24cmを測り、全体にしっかりした掘り込みである。

遺物は検出されないが、低位段丘面周辺における溝、土壇、ピット等は中世に位置づけられるものが多いことから、同時期の建物と推定しておきたい。

第13号掘立柱建物跡 (第273図)

調査区南端のI-10、J-9・10グリッドに位置する。西側隣接地を鴻巣市教育委員会が第5次調査として実施した際に、西桁行の一部が確認されていた。今回の調査により未調査部分を残すものの、ほぼ全容が把握され5間×3間の南北に長い側柱建物であることが確認された。規模は桁行9.5m、梁行5.7mを測る比較的大型の建物である。主軸方向はN-45°-Wを示す。

第273図 第13号掘立柱建物跡

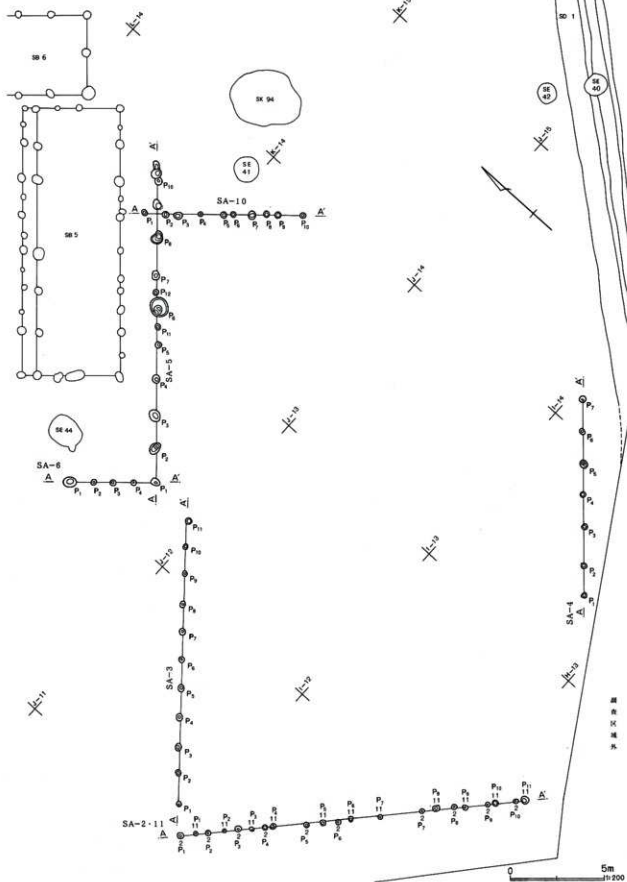


なお、西桁行の柱筋は第2・11号櫓列の主軸方向にはほぼ揃うことから同時存在と考えられる。

柱間寸法は桁行1.9m、梁行1.9m等間で、柱間に半間毎の補助柱をもつ。各柱筋は比較的良く通る。各柱穴は円形のものが多く、大きさは径61～30cm、深さ72～14cmで比較的規模の小さなもので構成される。補

助柱は全体に径が小さく、深度も浅い。柱痕は12本の柱穴で確認された。柱痕は灰色ブロック・粒子を含む灰褐色土の第1・4層が相当し、掘り方埋土はロームブロック・粒子を含む黒褐色土・黄褐色土を主体としていた。遺物は検出されなかったが、柱穴の規模及び覆土の状況から近世の建物と推定される。

第274图 第2·3·4·5·6·10·11号槽列



3. 柵列跡

C区の調査において柵列は合計12条が確認された。江戸時代の遺構の集中する調査区南側の上位段丘面を中心に2か所に分布していた。調査区南端の平坦地に第2・6・10・11号柵列が設置され、第5・6・13号掘立柱建物跡及び第44号井戸等との計画的な配置状況が窺われた。また調査区中央の斜面部を中心に第7・9・12・13号柵列が、区画溝に付属する形で設置されていた。

第2・11号柵列 (第274・275図)

第2号柵列と第11号柵列は同じ場所へ半間程ずらした形で立て替えられたもので、調査の段階では両者の先後関係を明確にできなかった。調査区南端のG-12、H-11・12グリッドに位置し、柱筋は北西に11.6m隔てた第13号掘立柱建物跡の南側柱筋に揃うことから計画的な配置が想定される。

第2号柵列は柱穴11本が検出され、全長17.8mを測る。欠落した柱穴を復元すると凡そ12間となる。主軸方向はN-48°-Wを示す。柱間寸法は2.2~1.5mと不揃いである。柱穴は円形を呈し、大きさは径40~20cm、深さ35~10cmである。覆土の状態は第1層が柱痕あるいは抜き取り痕に相当するものと考えられる。なお、西端のP1が第3号柵列の柱筋にはほぼ揃うことから同時存在が考えられる。

第11号柵列は柱穴11本が検出され、全長17.4mを測る。欠落した柱穴を復元すると凡そ12間となる。柱間寸法は攪乱等により欠落した柱穴もあるが、基本的には1.5m等間である。柱穴は隅丸方形を呈し、柱穴掘り方が第2号柵列と異なる。柱穴の大きさは径38~20cm、深さ34~10cmである。

第3号柵列 (第274・275図)

調査区南側のI-11・12グリッドに位置し、第2号柵列西端の柱穴と1.6mの間隔を有する。柱穴が11本検出され、全長15m(10間)を測る。主軸方向はN-50°-Eを示し、東へ20.8m離れた第4号柵列の柱筋に近く、関連性が窺われる。

柱間寸法は、5m等間を標準に前後若干のばらつき

があった。柱穴は円形を呈し、大きさは径42~29cm、深さ48~12cmを測り、全体に掘り込みはしっかりしている。覆土の状況は第1・4層が柱痕あるいは抜き取り痕、第2・3層が掘り方埋土と考えられる。

第4号柵列 (第274・275図)

調査区南側東端のH-13・14グリッドにかけて位置する。柱穴が7本検出され、全長10.5m(6間)を測る。主軸方向はN-48°-Eを示し、第3号柵列に近いことから関連性が窺われる。

柱間寸法は2.1~1.5mと不揃いで一定していない。柱穴は円形を呈し、大きさは径49~22cm、深さ30~12cmを測る。覆土の状況は第1層が柱痕あるいは抜き取り痕に相当し、第2~4層が掘り方埋土である。

出土遺物はまったく検出されなかった。

第5・6号柵列 (第274・276図)

第5・6号柵列は、調査区南側のJ-12、K-13グリッドにかけて位置する。西側に位置する第5号掘立柱建物跡と第44号井戸を取り囲むように鍵の手に配置された本来は一連の柵列である。配置状況から見てその性格は建物の目隠堀と考えられる。

第5号柵列は柱穴12本が検出され、全長16.2m(9間)を測り、主軸方向はN-48°-Eを示す。柱間寸法は凡そ1.8mを標準に前後のばらつきが見られた。またP5~P7の柱間には半間毎に補助柱P11・12が置かれていた。柱穴は円形ないし楕円形を呈し、大きさは径70~31cm、深さ65~30cmを測り、全体に掘り込みはしっかりしている。柱穴覆土中から焙烙の破片が出土したが、細片のため図示できなかった。

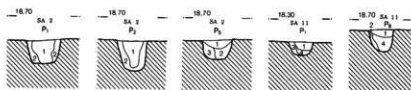
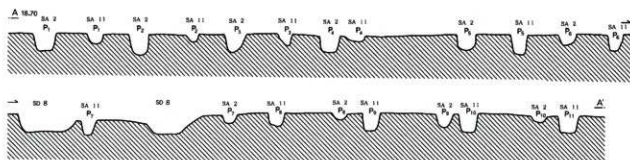
第6号柵列は柱穴4本が検出され、全長3.4m(3間)を測る。第5号柵列の南端のP1に柱筋を揃えており、一連のものと考えられる。主軸方向はN-43°-Eを示す。柱間寸法は1.1m等間で、第5号柵列より狭い。柱穴は円形を呈し、大きさは径70~30cm、深さ60~10cmを測る。P1は他に比べ規模が大きい。覆土は第1層が柱痕あるいは抜き取り痕に相当する。

第7・8・9号柵列 (第277~279図)

第7~9号柵列は、調査区中央のJ-N-21~25グ

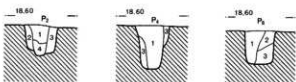
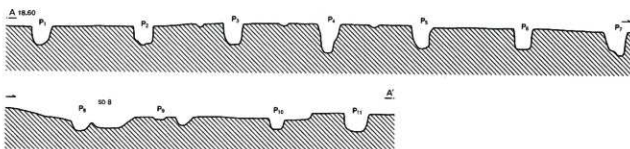
第275図 第2・3・4・11号横列断面図

SA 2・11



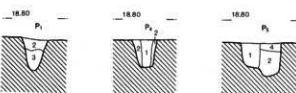
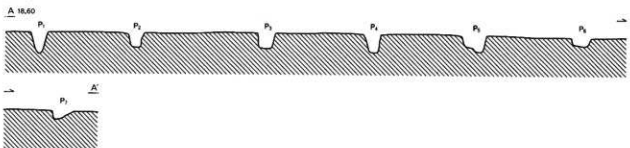
- SA 2・11
- 1 暗褐色土 ローム粒子・粘土粒子少量
 - 2 暗褐色土 ロームブロック少量
 - 3 暗黄褐色土 ロームブロック多量
 - 4 暗褐色土 ローム粒子少量

SA 3



- SA 3
- 1 暗褐色土 ローム粒子・粘土粒子少量
 - 2 暗褐色土 ロームブロック少量
 - 3 暗黄褐色土 ロームブロック多量
 - 4 暗褐色土 ローム粒子少量

SA 4

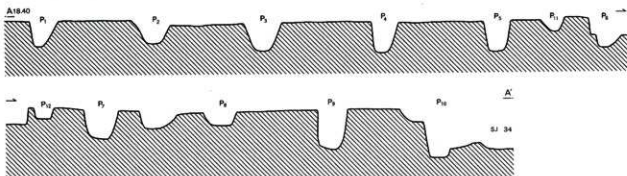


- SA 4
- 1 暗灰褐色土 ロームブロック少量、灰褐色ブロック多量
 - 2 暗褐色土 ロームブロック少量
 - 3 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量
 - 4 灰褐色土 ロームブロック・灰褐色ブロック少量

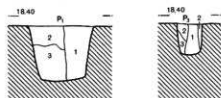
0 1m

第276図 第5・6・10号柵列断面図

SA 5



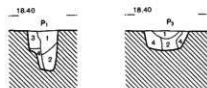
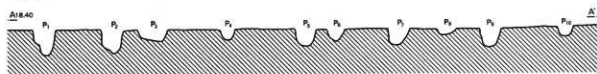
SA 6



SA 6

- 1 暗褐色土 ロームブロック多量、粘土粒子少量
- 2 暗灰褐色土 ローム粒子・焼土粒子少量
- 3 暗褐色土 ロームブロック少量

SA 10



SA 10

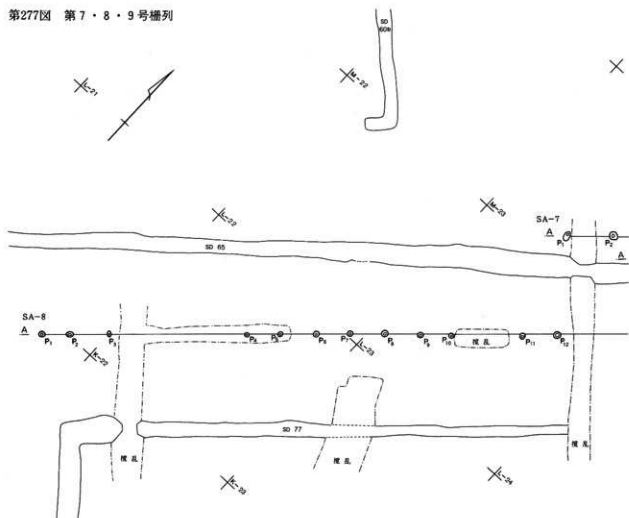
- 1 暗褐色土 ロームブロック多量、灰色ブロック少量
- 2 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量
- 3 暗褐色土 灰色ブロック・灰色粒子多量
- 4 暗黄褐色土 ロームブロック多量

0 1m

リッドにかけて位置する。第7・9号柵列は北東から南西に向かって走行する第65号溝の北辺に設置され、第8号柵列は第65号溝と第77号溝に挟まれた位置に設置されている。これらの柵列は区画溝に付属する塚と考えられ、計画的な配置状況が読み取れる。

第7号柵列は柱穴23本が検出され、L字形に配置していた。P1～P14の距離は22.8m(約15間)を測り、主軸方向はN-49°-Eを示す。P15～P23の距離は10m(8間)を測り、主軸方向はN-42°-Wを示す。

柱間寸法はP1～14の間は2.35～1.05mで揃い



であるが、P15～23の間は1.4～1.2m前後で、ほぼ揃っている。柱穴は円形を呈し、大きさは径52～25cm、深さ61～20cmを測る。

第9号柵列は第65号溝と第7号柵列の間に所在する。柱穴5本が検出され、全長12.8mを測る。第37号墳と重複するため欠落した柱穴が多い。主軸方向は第7号柵列よりもやや西に振れ、N-47-Eを示す。

柱間寸法は2.5～1.7mと不揃いである。柱穴は円形で、大きさは径40～30cm、深さ23～12cmを測る。

第8号柵列は柱穴19本が検出され、全長51mを測る。後世の擾乱により欠落する柱穴も多いが、約28間に復元され、調査区外にさらに延びる可能性も残されている。主軸方向はN-47-Eを示す。

柱間寸法は1.9～1.8m前後である。柱穴は円形を呈し、大きさは径38～24cm、深さ40～8cmを測る。覆土

の状況は第1層中に浅間A軽石が含まれていることより、下限時期が凡そおさえられる。第2層が柱底、第3層が柱穴掘り方埋土である。

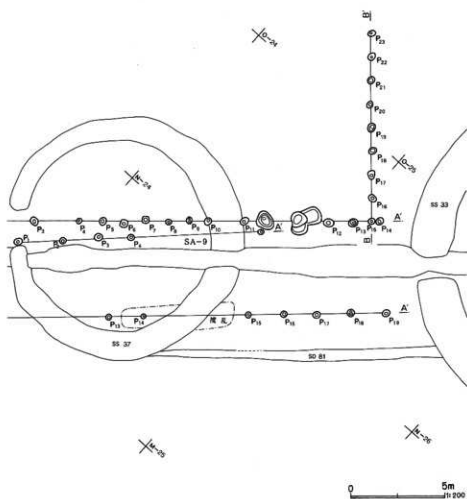
第10号柵列 (第274・276図)

調査区南側のJ・K-13グリッドに位置する。第5号掘立柱建物跡の北端から3間目の柱穴と柱筋を揃えて南東方向へ延びる。第5号柵列と重複しているが、先後関係は明確にできなかった。柱穴10本が検出され、全長8.5m(6間)を測る。主軸方向はN-42°Wを示し、第6号柵列と柱筋を揃える。

柱間寸法は1.8～1.3mと不揃いで、比較的狭い。P2・6・8は補助柱と考えられる。柱穴は円形を呈し、大きさは径55～23cm、深さ42～10cmを測る。

第12号柵列 (第280・281図)

調査区中央西寄りのP-19、Q-18、R-17グリッ



ドにかけて位置する。全長35.4mの長大な柵列で、柱穴15本を検出した。第10・11号掘立柱建物跡と重複しているが、先後関係は不明である。また多数の土壁と重複しているため欠落した柱穴も多い。主軸方向はN-47°-Wを示す。

柱間寸法は3~1.9mと不揃いである。柱穴は円形が多く、大きさは径44~18cm、深さ40~12cmとやや幅が大きい。覆土の状況は第2層が柱底、第3層が掘り方埋土に相当する。

この柵列は、北西から南東方向へ並行して延びる第60・62号溝に挟まれた位置にあることから、第62号溝の内側に取り付いた区画堀と考えられる。

第13号柵列 (第280・281図)

調査区中央東寄りのH-23・24、I-23グリッドにかけて位置する。全長18mを測り、柱穴6本を検出した。P4とP5の間は柱筋に乗る明確な柱穴が検出されなかった。主軸方向はN-46°-Wを示す。

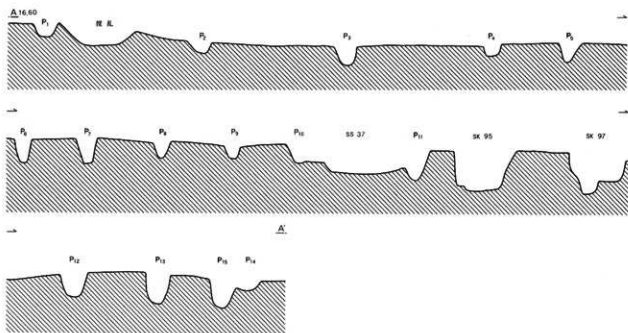
柱間寸法は3.6~1.6mと一定しない。柱穴は円形あるいは楕円形で、大きさは径90~30cm、深さ38~11cmを測る。覆土の状況については不明である。

西端のP1から西へ1.7mの位置で、鍵の手に東へ折れる第77号溝に続くことから、それに付属する区画堀と考えられる。

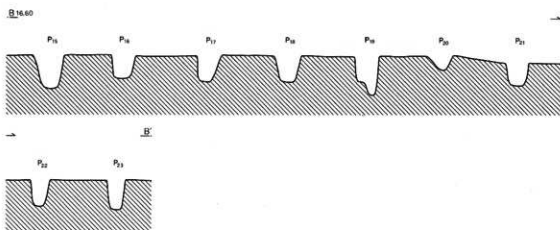
この他に遺構番号を付さなかったが、第1号溝の北東辺及び第70号溝の北西辺に3~4本の柱穴が直線的に並ぶ部分が数か所確認されている。

第278图 第7·9号槽列断面图

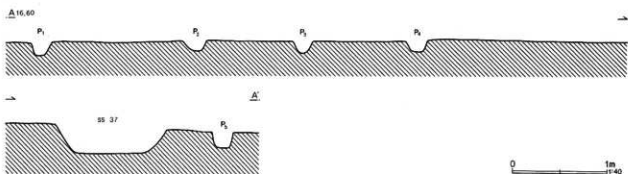
SA 7



SA 7

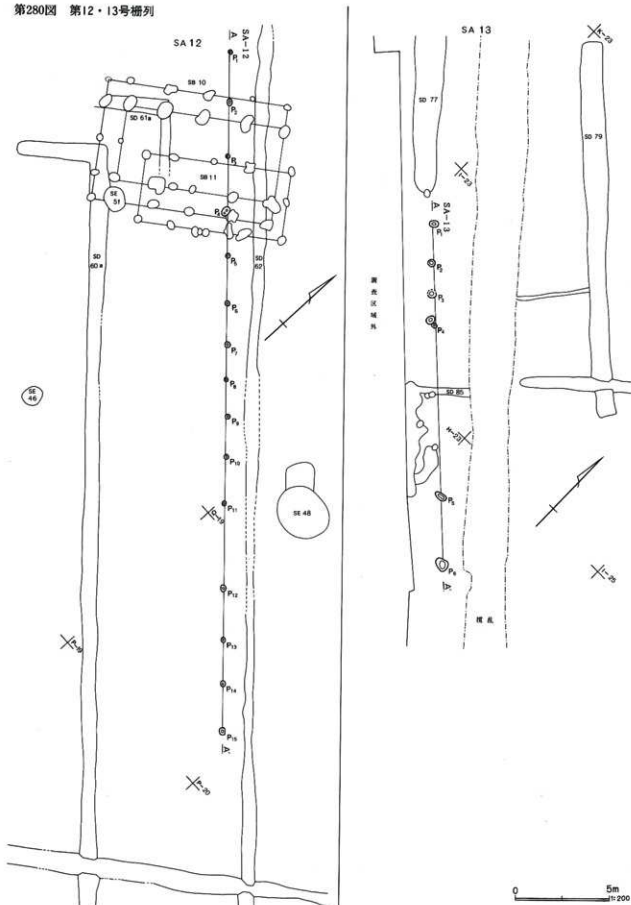


SA 9



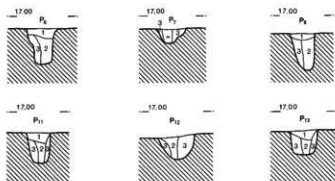
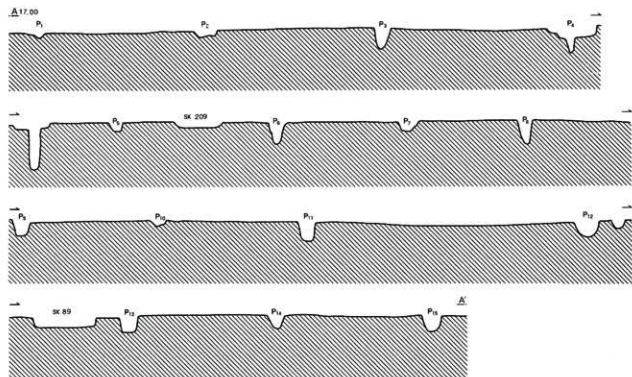
0 1m 1:40

第280图 第12・13号册列



第281図 第12・13号標列断面図

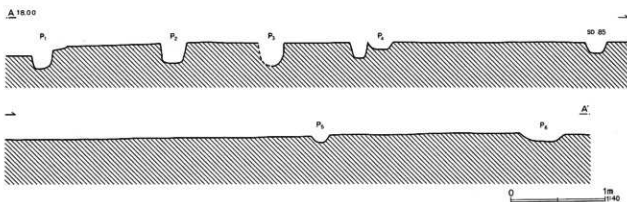
SA 12



SA 12

- 1 暗褐色土 ローム粒子・灰褐色土少量
- 2 暗褐色土 ローム粒子少量
- 3 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子少量

SA 13



第282図 ビット群



4. ビット群

低位段丘面のU-Y-25-29グリッドにかけて多数のビットが群在し、特に第23-25号墳の周辺に集中していた。この中には建物や柵列を構成するものも相当数含まれていると推定されるが、現状では柱並びがうまく揃わないため単独ビットとしたもので、第282図にその平面図を掲載した。

遺物は図示し得なかったが土師器、須恵器、埴輪、陶磁器、かわらけ、鉄製品、石製品、古銭等が少量出土している。覆土中に浅間A軽石を含むものが認められ、大半は中・近世の所産と考えられる。

他に上位段丘面のR・S-17-20グリッドの第44号墳周辺にもビット群が検出されたが、建物や柵列等の所在は明らかにできなかった。

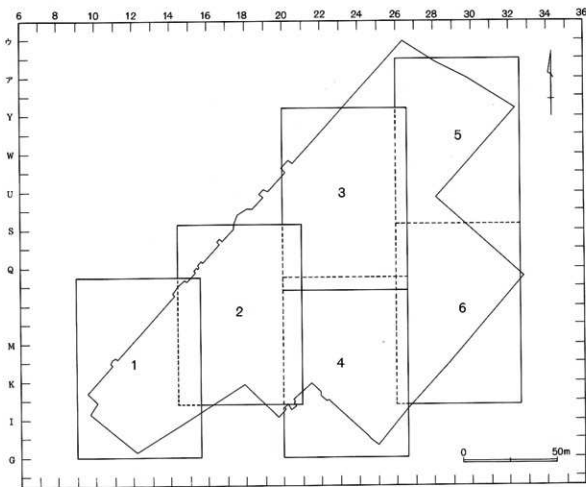
5. 溝跡

C区の調査において溝跡は合計53条が確認された。このうち第1・2・8・23・25・26号溝の6条はA・B区から継続する溝跡である。出土遺物や覆土の状況から大半が中世以降の溝跡と考えられる。溝跡の遺構配置図は第283-289図に、土層断面図は第290図に、出土遺物は第291・292図に掲載した。

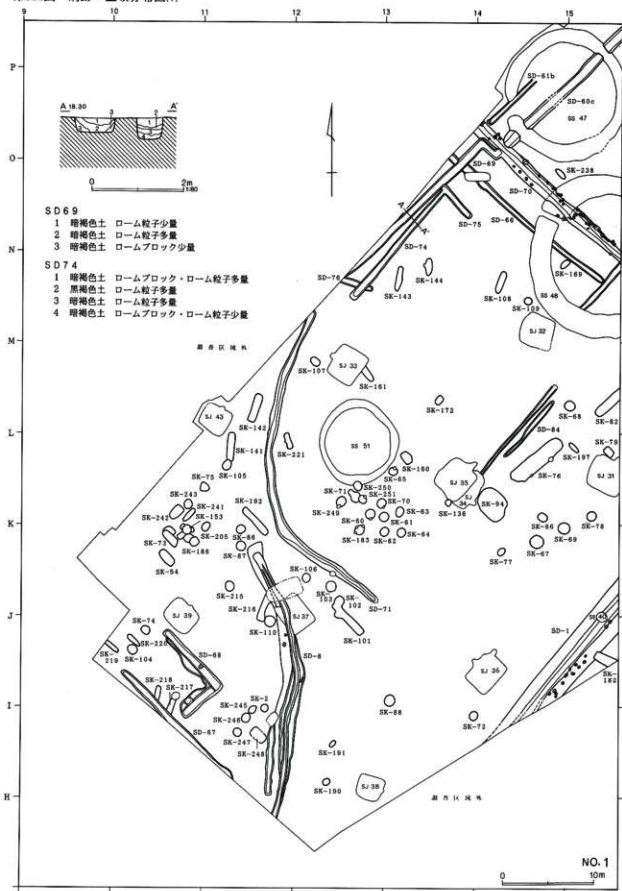
第1号溝 (第284・285・290・291・319図)

A区に接する調査区南端のH-14-L-17グリッドにかけて位置する。A区で直角に屈曲して向きを変えC区の調査区内では南西から北東方向に向かって直線的に約49m延びる。北東端で第2溝と重複し、第72号溝に接続する。また溝内には第39・40号井戸と土壌墓である第81号土壌が重複していた。断面形態はいわ

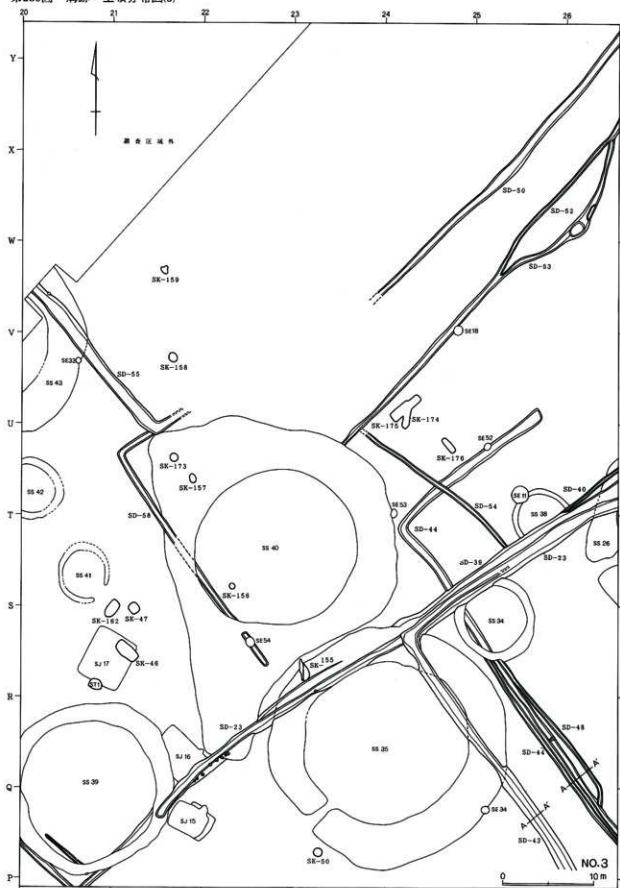
第283図 溝跡・土壌配置分割図



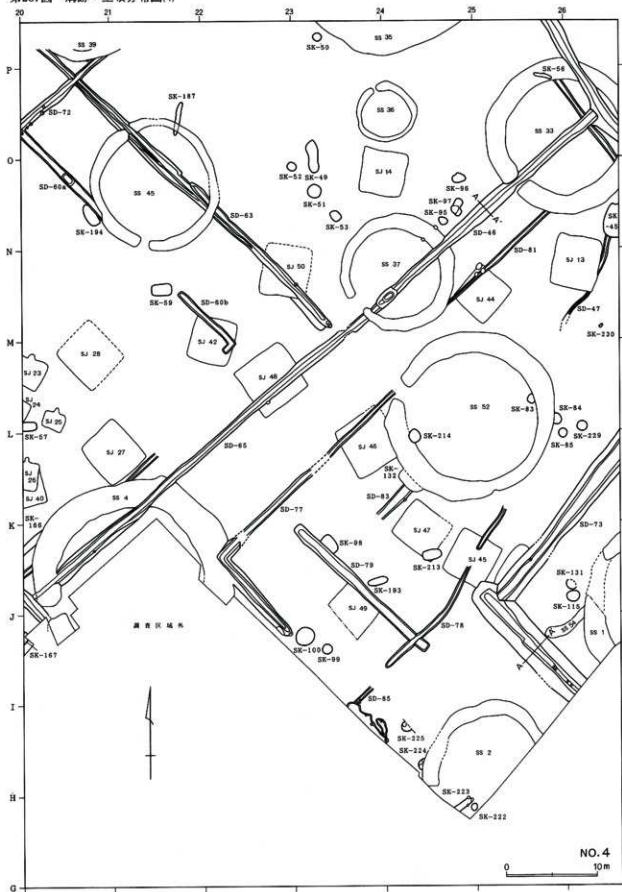
第284図 溝跡・土坑分布図(1)



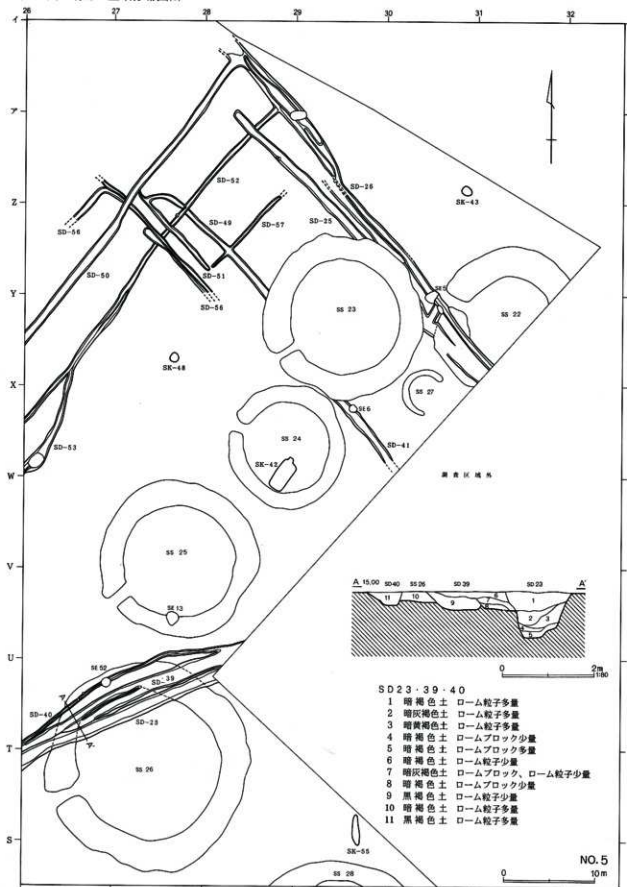
第286図 溝跡・土堀分布図(3)



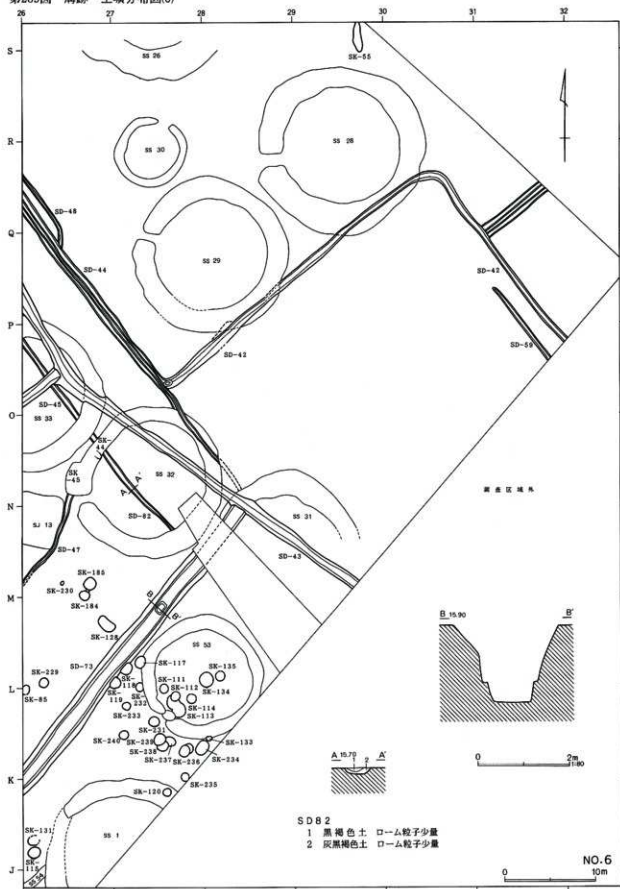
第287図 溝跡・土坑分布図(4)



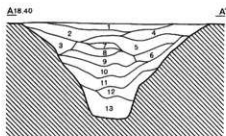
第288図 溝跡・土壌分布図(5)



第289図 溝跡・土壌分布図(6)

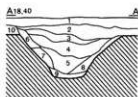


第290図 溝跡断面図



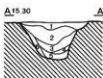
SD 1

- 1 暗褐色土 ローム粒子少量
- 2 暗褐色土 ローム粒子やや多量
- 3 暗褐色土 ローム粒子・炭化物粒子少量
- 4 暗褐色土 ローム粒子多量
- 5 暗褐色土 ローム粒子少量
- 6 黒褐色土 ローム粒子少量
- 7 黄褐色土 ローム粒子・粘土粒子少量
- 8 黄褐色土 ロームブロック多量
- 9 黒褐色土 ロームブロック・粘土ブロック少量
- 10 黒褐色土 ローム粒子・炭化物粒子少量
- 11 黒褐色土 ローム粒子多量
- 12 褐色土 ローム粒子多量
- 13 褐色土 ロームブロック多量



SD 2

- 1 耕作土 浅層A粒子少量
- 2 暗褐色土 浅層A粒子・ローム粒子少量
- 3 暗褐色土 ローム粒子多量
- 4 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子少量
- 5 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量
- 6 明褐色土 ローム粒子少量
- 7 暗黄褐色土 ロームブロック多量
- 8 明褐色土 ロームブロック多量
- 9 暗褐色土 ロームブロック少量
- 10 明褐色土 ローム粒子多量



SD 4 3

- 1 暗灰褐色土 ローム粒子少量
- 2 暗褐色土 ローム粒子少量
- 3 暗褐色土 ローム粒子やや多量
- 4 暗黄褐色土 ローム粒子多量
- 5 褐色土 ローム粒子多量
- 6 暗黄褐色土 ロームブロック多量

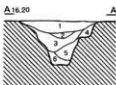


SD 4 4

- 1 暗褐色土
- 2 暗黄褐色土 ローム粒子少量
- 3 暗褐色土 ロームブロック
- 4 暗褐色土 ローム粒子少量
- 5 暗黄褐色土 ローム粒子多量

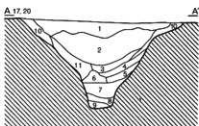
SD 4 8

- 1 黒褐色土



SD 4 6

- 1 暗褐色土
- 2 暗黄褐色土 ロームブロック
- 3 暗黄褐色土 ローム粒子少量
- 4 暗褐色土 ローム粒子多量
- 5 黒褐色土 ローム粒子少量
- 6 暗褐色土 ローム粒子少量



SD 7 3 A-A'

- 1 暗褐色土 ローム粒子少量
- 2 暗褐色土 ローム粒子多量
- 3 暗褐色土 ロームブロック多量
- 4 暗褐色土 ロームブロック少量
- 5 黒褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量
- 6 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量
- 7 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子少量
- 8 黒褐色土 ローム粒子少量
- 9 暗黄褐色土 ローム粒子少量
- 10 明褐色土 ローム粒子少量
- 11 暗褐色土 ロームブロック少量・ローム粒子多量



ゆる箱葉研堀で、幅4.3m、深さ2mを測る大規模なものである。方位はN-40°-Eを示す。

遺物は、かわらけ、有田産の染付磁器碗、丸碗、焼塩壺、瀬戸・美濃系の灰釉皿皿、古銭等がある。焼塩壺には上半部が欠損しているが特線一重の「天一御壺塩師 埴見など伊織」の刻印がある。第319図9は元豊通宝(初鑄年号北宋1078年)、15は寛永通宝の古寛永(初鑄年号1636~1656年)である。

第2号溝(第285・290・291図)

A区に接する調査区南側のJ-18~L-18グリッドにかけて位置する。A区から北東に直線的に延び、C区の調査区内で北西方向にほぼ直角に向きを変える。調査区内における全長約25mで、断面形態は箱葉研堀に近く、幅2.2m、深さ1.3mを測る。北西端は第1号溝と重複しているが、切り合い関係は明確でない。方位はN-49°-Wを示す。

遺物は第291図の刀子1点が出土しただけである。刃部と茎の区分は明確でないが、茎に目釘穴を2個並べて開けている。時期を推定する遺物の出土はないが、近世以降の所産と推定される。

第8号溝(第284図)

調査区南端のP-21~T-28グリッドにかけて位置する。A区から続く溝で、調査区内で緩やかに湾曲して流れる。調査区内における長さ約30.3m、幅2.4m、深さ0.5mを測る。第37号住居跡を切っている。方位はN-8°-Eである。時期不詳である。

第23号溝(第286・288・291図)

B区に接する調査区北側のP-21~T-28グリッドにかけて位置する。上位段丘面の第72号溝から続いて調査区内を東流して低位段丘面に至り、B区を貫流する。調査区内では全長約78m、幅1.8m、深さ1.05mを測る。第26・34・35・39・40号墳の周溝と重複し、第26号墳の北側で第39・40号溝と重複する。方位はN-58°-Eを示す。

遺物は常清産の甕、龍泉窯系の青磁鎗蓮弁文碗、砥石、刀子等が出土した。第291図1・2の常清産の甕は口縁部の形態から12世紀代に位置づけられる。7の刀

子は鉄製の鑷が残る。出土遺物の様相から中世の溝と推定される。

第25号溝(第288図)

調査区北端のX-30~ア-28グリッドにかけて位置する。B区から北西に向かって埋没谷に延び、長さ約40mを確認した。幅1.2m、深さ0.2mを測る。第22・23号墳の周溝を貫流して直線的に延び、北西端で第22号溝と重複する。方位はN-44°-Wである。覆土上層に浅間B軽石が堆積しており古代の掘削と推定されるが、時期を示す遺物は出土しなかった。

第26号溝(第288図)

第25号溝の北側を走行する溝で、調査区内で約45mを確認したが、北西端は埋没谷に流れ込み、不明瞭になっていた。幅2.2m、深さ0.36mを測り、方位はN-39°-Wを示す。第22号墳、第5号井戸と重複していた。第25号溝と同じく覆土上層に浅間B軽石の堆積が認められ、掘削時期は古代に遡る可能性が強い。

第39号溝(第286・288・291図)

調査区北側のQ-22~T-27グリッドにかけて位置する。第23号溝と一部重なりながら南西から北東へ約65m延びる。幅1.9m、深さ0.42mを測り、第26号墳の北側の土層断面の観察によれば、第23号溝よりも古いことが判る。方位はN-57°-Eである。

遺物には常滑の甕底部及び片口鉢の破片が出土している。時期は13世紀頃と推定される。

第40号溝(第286・288図)

調査区北側のT-26・27、U-27・28グリッドに位置する。第23・39号溝に合流する幅の狭い溝で、約27mを確認した。幅0.6m、深さ0.3mを測り、断面逆台形である。方位はN-53°-Eである。

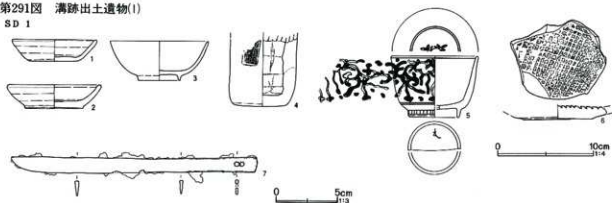
遺物は第26号墳に伴うと考えられる埴輪、須恵器等が出土したにすぎない。時期はおそらく第23・39号溝と同じく中世の所産であろう。

第41・49号溝(第288図)

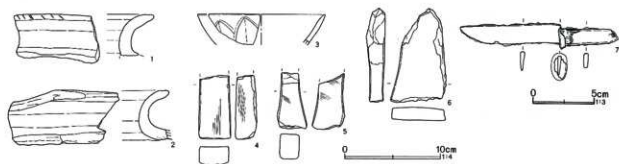
調査区北側のW-29~Y-28グリッドにかけて位置する。第23号墳の周溝の中を走行して第49号溝に合流するものと考えられる。北西方向に約40mほど直線

第291図 溝跡出土遺物(1)

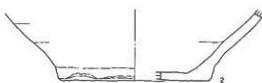
SD 1



SD 23



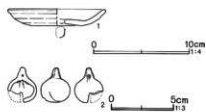
SD 39



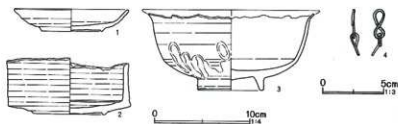
SD 55



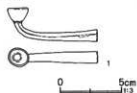
SD 56



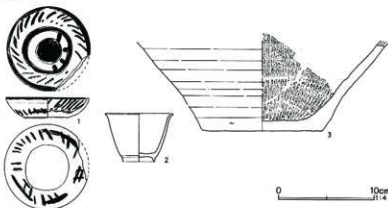
SD 63



SD 68



SD 78

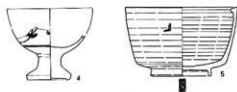
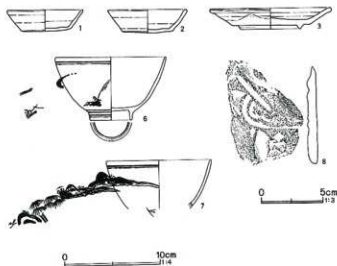


SD 89

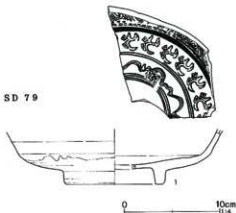


第292図 溝跡出土遺物(2)

SD 77



SD 79



溝出土遺物観察表

遺構	番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
SD-1	1	かわらけ	8.9	2.3	5.3		A	にぶい黄橙	100	
	2	かわらけ	(9.6)	2.5	6.1		A	にぶい橙	60	
	3	碗	(10.4)	4.1	(4.6)	G	A	白色	30	
	4	焼壺		7.8	5.8	B F	A	橙褐	50	刻印「天下—御壺師理見なと伊織」
	5	碗	(9.0)	6.4	(5.2)				45	有田産
	6	卵皿			7.3	B G	A	灰白	90	破断面を砥石として転用
SD-Z	1	刀子								長さ19.9 身幅1.25 棟幅0.35cm
SD-23	1	蓆							5	内外面輪を刷毛塗り
	2	蓆								
	3	碗								
	7	刀子								長さ12.6 身幅1.5 棟幅0.38cm
SD-39	1	片口鉢								
	2	蓆								
SD-55	1	灰釉皿	(12.8)	2.3	(7.2)	B G	A	灰白	30	
SD-56	1	かわらけ	(10.0)	1.8	(5.6)	B E F	A	橙褐	40	底部穿孔有り
	2	土鈴								縦3.6 横3.1cm
SD-63	1	皿	12.0	2.4	6.3		A	灰白	90	
	2	香炉		(6.0)	7.5		A		90	
	3	鉢		(8.0)	7.0		A	灰白	40	
	4	銅製銅製品								長さ3.7 幅0.9cm
SD-69	1	有耳壺		(7.1)	4.7		A		95	褐色釉
SD-77	1	かわらけ	8.0	2.3	5.3		A	橙	80	
	2	かわらけ	8.3	2.4	5.3		A	にぶい橙	100	
	3	皿	(12.8)	2.2	(6.2)		A		25	
	4	仏飯器		(4.5)	4.5		A		50	
	5	香炉	12.0	7.2	6.3		A	淡黄	50	京焼風
	6	碗	(11.6)	6.6	4.5		A	灰白	40	有田産
	7	碗	(11.6)	(5.0)			A	灰白	35	有田産
	8	板石塔婆								長さ(11.0) 幅(7.6) 厚さ1.0cm
SD-78	1	かわらけ	8.8	2.2	4.5		A	橙	95	内外面共に黒書
	2	碗	7.1	5.1	3.4		A		50	
	3	播鉢		(9.5)	12.7		A	橙	40	
SD-79	1	大鉢		(5.8)	(10.2)		A	褐灰	15	内面三鳥出文

的に伸び、北西端部で緩やかに屈曲する。幅1.2m、深さ0.21mを測り、断面逆台形を呈する。埋没谷に面した北西側で第51・52・57号溝と重複しているが、先後関係は不明である。方位はN-40°-Wである。

出土遺物がなく、時期は不詳である。

第42号溝 (第289図)

調査区東端のO-27~Q-30グリッドにかけて位置する。調査区域外から北西へ走行し、第28号墳の付近で南西に向きを変え、第44号溝に合流する。調査区内において全長約61.5mを確認した。第28・29号墳の周溝を貫流し、断面逆台形を呈し、幅1.5m、深さ0.48mを測る。方位はN-52°-Eである。

遺物はほとんどなく、時期は不詳である。

第43号溝 (第286・289・290図)

調査区中央のM-28~R-24グリッドにかけて位置する。第23号溝から分岐する形で北西から南東にかけて約80m程伸びる。第35号墳の東側墳丘裾をかすめて南東に流れ、第33号墳の墳丘部分で僅かに屈曲して第45号溝と合流し、さらに埋没谷に向かって流れ、第73号溝と第33号墳部分で合流する。幅2.4m、深さ0.8mを測り、断面形態は箱築研に近い。方位はN-35°-Wである。

遺物は常滑の甕の破片が出土していることから中世の所産と推定される。

第44号溝 (第286・289・290図)

調査区中央のO-27~U-25グリッドにかけて位置する。北西方向に直線的に伸び、第40号墳の東側で北東へ直角に折れ、全長約88mを確認した。幅1.6m、深さ0.27mを測る。方位はN-35°-Wである。

遺物は埴輪片、陶磁器等が少量出土したが、時期を示す遺物はなかった。配置状況には第42・43号溝と密接な関連が窺われることから区画溝としての性格が推定される。

第45・82号溝 (第287・289図)

調査区中央のM-27~O-26グリッドにかけて位置する。調査の便宜上、第82号溝と区別したが本来は同一の溝である。全長約27mで、幅0.8m、深さ0.16

mの幅の狭い直線的な溝である。第32・33号溝と重複し、東側には第44号溝が約9mの間隔を隔てて同一方向に走行している。方位はN-39°-Wである。

遺物は古墳からの混入が多く、時期不詳である。

第46・65号溝 (第287・290・319図)

調査区中央東寄りのJ-19~O-26グリッドにかけて位置する。調査の便宜上、第65号溝と区別したが本来は同一の溝である。南西から北東に向かってほぼ一直線に伸び、全長約82m、幅1.8m、深さ0.95mを測る。配置状況から見て第7・8号柵列が付属するものと推定される。方位はN-49°-Eである。

遺物は土師器、須恵器、埴輪、常滑、陶磁器、古銭等が出土している。第4号墳と重複する第65号溝の覆土中からは第319図1・3の古銭が出土した。1は五銖銭(初鑄年号 後漢40年)、3は至道元宝(初鑄年号 北宋995年)である。出土遺物の様相から溝の時期は近世に比定される。

第47号溝 (第287図)

調査区中央東寄りのM・N-26グリッドに位置する。南西から北東にかけて約11.5mやや蛇行して伸びる。幅0.7m、深さ0.3mの幅の狭い溝で、南西端は浅くなり消滅する。第32号墳、第13号住居跡等と重複している。走行方向からすると第78・85号溝と同一の可能性がある。方位はN-19°-Eを示す。

出土遺物がなく、時期は不詳である。

第48号溝 (第286・289図)

調査区中央のP-26~R-25グリッドにかけて位置する。第44号溝から分流して北西から南東にかけて約20m伸びる。幅0.5m、深さ0.8mを測り、北西端は第34号墳を切り、南東端は屈曲して第44号溝に合流する。方位はN-40°-Wを示す。

出土遺物がなく、時期は不詳である。

第50号溝 (第286・288図)

調査区北西側西寄りのV-23~ア-28グリッドにかけて位置する。南西から北東に向かってほぼ一直線に約69m伸び、東に8~5.5mの間隔を置いて第52号溝が並行して走る。幅1.4m、深さ0.46mを測り、断面箱

形を呈し、北東端で第26号溝に合流している。走行方向からすると第55号溝と同一の可能性が有る。方位はN-40°-Eを示す。

出土遺物には形象埴輪、須恵器、常滑等があるが、時期は不詳である。

第51号溝 (第288図)

調査区北側西寄りのY・Z-27グリッドに位置する。南東から北西にかけて約11.7m伸び、北西端で緩やかに屈曲し、第50号溝に合流する。幅0.65m、深さ0.14mを測る。方位はN-43°-Wを示す。

出土遺物がなく、時期は不詳である。

第52・53号溝 (第286・288図)

調査区北側西寄りのT-23-Z-28グリッドにかけて位置する。南西から北東に向かって一直線に約81.5m伸び、V-25-X-26グリッドの位置で第53号溝が二又に分岐していた。東辺には第18・23号井戸が重複し、南西端は第40号墳につながり、北東端は第26号溝に接する。第53号溝は弧状に走行し、溝底面に土塊状の掘り込みが確認された。溝の断面形は逆台形を呈し、幅1m、深さ0.18mを測る。方位はN-39°-Eである。

出土遺物には常滑産の片口鉢等が認められることから時期は中世に比定される。

第54号溝 (第286図)

調査区北側のS-25-T-25グリッドにかけて位置する。南東から北西に向かって約20m伸びる。南東端は第23・39号溝に接し、第44号溝と重複し、北西端は浅くなり消滅する。断面形は逆台形を呈し、幅0.5m、深さ0.24mを測る。方位はN-55°-Wである。

遺物は少なく、時期は不詳である。

第55号溝 (第286・291図)

調査区中央西寄りのT-21-V-20グリッドにかけて位置する。調査区域外から継続し、第43号墳の北側周溝と重複し、約20m直進した後、ほぼ直角に北東へ折れ、谷地内で消滅していた。調査区内における全長約25m、幅1.8m、深さ1.1mを測り、断面逆台形である。走行方向からすれば第50号溝と同一の可能性が

ある。方位はN-42°-Wである。

遺物は灰釉皿が出土しており、中世に比定される。

第56号溝 (第288・291図)

調査区北側西寄りのY-26・27、Z-26グリッドに位置する。南東から北西に向かって伸び、谷地内で直角に折れ曲がる。全長約22m、幅1.3m、深さ0.28mを測る。方位はN-45°-Wである。

出土遺物は、かわらけ、土鈴、埴輪片、青磁片等がある。第291図にかわらけと土鈴を図示した。かわらけは底部に焼成後の穿孔が認められた。土鈴は鈴口部分を欠損する。胎土は精選され色調は白色を呈する。時期は近世に比定される。

第57号溝 (第288図)

調査区北側西寄りのY・Z-28グリッドに位置する。北東から南西に約11m伸びる。幅0.45m、深さ0.12mを測り、第49号溝と直行して重複する。方位はN-45°-Eである。

遺物は土師器片のみで、時期は不詳である。

第58号溝 (第286図)

調査区中央西寄りのS-21・22、T-21グリッドに位置する。南東から北西方向に直線的に伸びた後に北東へ折れ曲がり、第55号溝に合流する。全長約33m、幅0.7m、深さ0.13mを測り、第40号墳及び第54号井戸と重複する。方位はN-35°-Wを示す。

出土遺物がなく、時期は不詳である。

第59号溝 (第289図)

調査区中央東端のO・P-31グリッドに位置する。調査区域外から継続し、北西へ約10m直線的に伸びる。幅0.55m、深さ0.36mを測り、北側約2mに第42号溝が並走する。方位はN-38°-Wを示す。

出土遺物がなく、時期は不詳である。

第60号溝 (第284・285・287図)

第60号溝は調査区中央の上位段丘面に所在し、標高16.5mの等高線に沿うように一直線に走り、南東端で鍵の手に曲がる。また調査区の西寄りの位置ではほぼ直角に折れ曲がり第46・47号墳と重複し、第70号溝に合流する。走行方向からすると第69号溝と同一の可能性が

が強い。重複や後世の擾乱により途切れ途切れになっているため便宜上 a・b・c 溝と呼称した。

第60a号溝はN-20-Q-17グリッドにかけて位置する。全長約56m、幅1m、深さ0.23mを測る。第41号住居跡、及び第45・46号墳と重複している。方位はN-47-Wである。第60b号溝はL-22、M-21-22グリッドに位置する。全長約10m、幅0.8m、深さ0.1mを測る。第42号住居跡と重複する。方位はN-46-Wである。第60c号溝はO-14-Q-16グリッドにかけて位置する。全長約29.5m、幅1.5m、深さ0.45mを測る。第18号住居跡、及び第46・47号墳と重複する。方位はN-47-Eである。なお、東側に約8.4mの間隔を置いて第62・63号溝が並行していることから屋敷地等の区画溝として同時期に機能していたものと推定される。

出土遺物には瀬戸・美濃系の天目茶碗、菊皿等の細片が検出されたが、図示できなかった。時期は近世に比定される。

第61号溝 (第284・285図)

第61号溝は調査区中央西寄りに位置し、第60号溝の西辺に沿うように屈曲して南西方向に延びる。第46・47号墳との切り合いや、擾乱による削平のため途切れ途切れになって確認され、調査の便宜上 a・b 溝に区分した。

第61a号溝はR-17グリッドに位置し、全長約7mを確認した。幅0.8m、深さ0.1mを測る。方位はN-50°-Eを示す。第61b号溝は、第61a号溝の延長線上のO-14グリッドに位置し、全長約7mを確認した。幅0.6m、深さ0.23mを測る。削平により消滅した部分が多く、不明な点があるが第60号溝と共通した配置計画が窺われる。出土遺物はない。

第62・63号溝 (第285・287・291図)

調査区中央の上位段丘面に北西から南東に向かって一直線に延びる。調査の便宜上第73号溝を境に第62・63号溝に区分したが、本来同一の溝である。

M-22-R-18グリッドにかけて位置し、総延長約94mを確認した。幅1.8~0.85m、深さ0.71~0.19m

を測る。南東端は第7号柵列の南西端と重なり、北西端は調査区外に延びる。第50号住居跡、第39・45号墳、第10・11号掘立柱建物跡等と重複する。第63号溝部分は数条の溝が重複した状況を呈しており、掘り返しが行われたものと考えられる。方位はN-47-Wを示す。なお配置状況から見て第60・61号溝、第2・7・8号柵列等と関連性が窺われる。

遺物には第63号溝から陶器皿、香炉、鉢、鎖状銅製品等が出土した。皿、香炉は瀬戸・美濃系の製品である。香炉は口縁部を打ち欠き、2次利用している。17世紀後半。同様に鉢も口縁部を打ち欠き、2次利用されている。鎖状銅製品はS字形の銅線を連結したものである。銅線の断面は矩形を呈する。出土遺物の様相は17世紀後半から18世紀前半に比定される。

第64号溝 (第285・287図)

調査区中央東寄りのJ-19-K-19グリッドにかけて位置する。北西から南東に約21m延びる。第4・50号墳と重複し、北西端は第2号溝に合流し、南東端は調査区域外に延びる。幅1.8m、深さ0.67mを測り、断面逆台形を呈する。方位はN-43°-Wである。

遺物がなく、時期は不詳である。

第66号溝 (第284・285図)

調査区南側西寄りのM-15、N-13・14グリッドに位置する。北西から南東に約21.8m延びる。幅1.2m、深さ0.1mを測る。第48号墳、第69号溝と重複する。北東側に約4mの距離を置いて第70号溝が並行して走行しており、関連性が窺われる。方位はN-51°-Wを示す。

出土遺物がなく、時期は不詳である。

第67号溝 (第284図)

調査区南端のH-10・11、I-10グリッドに位置する。調査区際を北西から南東に約17m延びる。幅0.8m、深さ0.15mを測り、南東端は調査区域外に延びる。方位はN-46°-Wを示す。

遺物には土師器等があるが、時期は不詳である。

第68号溝 (第284・291図)

調査区南端のI-10・11グリッドに位置する。L字

形に屈曲し、全長は約14.5m、幅1.8m、深さ0.52mを測る。南西側は第217号土溝と重複する。方位はN-45°-Wを示す。

出土遺物には内耳鉢、かわらけ、煙管の雁首等がある。溝の所産時期は近世に比定される。

第69号溝 (第284・291図)

調査区南側西寄りのM-12-O-14グリッドにかけて位置する。北東端はL形に屈曲して第70号溝と重複し、南西端は調査区域外に延びる。第70号溝を境に第61号溝と区別したが、走行方向が同じであることから本来一連のものと考えられる。全長約24.3m、幅0.7m、深さ0.33mを測り、断面逆台形を呈する。方位はN-48°-Eである。

遺物には有耳壺、摺鉢等がある。第291図1は瀬戸・美濃系の有耳壺で、外面に褐色釉が掛る。溝の時期は近世に比定される。

第70号溝 (第284・285図)

調査区中央西寄りのL-18-O-14グリッドにかけて位置する。北西から南東に向かって全長約51.5m延び、幅1.8m、深さ0.7mを測る。第48・49号溝と重複し、北西端は調査区域外に延び、南東側で北東方向に直角に折れ曲がる。方位はN-52°-Wである。

遺物は埴輪、須恵器等が出土したにすぎない。所産時期は明確でないが、溝の断面形や配置状況から近世に比定しておきたい。

第71号溝 (第284図)

調査区南側西寄りのJ-11-M-12グリッドにかけて位置する。北から南に向かって延び、南側で緩やかに湾曲して南東に向きを変える。全長約37m、幅1.3m、深さ0.12mを測る。第5号溝列と重複する。方位はN-71°-Eである。

遺物は土師器、須恵器等が出土しているが、時期は不詳である。

第72号溝 (第285図)

調査区中央のL-17-M-12グリッドにかけて位置する。南西から北東に向かって緩やかに弧を描いて約37m延びる。調査の便宜上、第23号溝と区別した

が、本来は同一の溝であろう。断面形態は逆台形を呈し、幅1.7m、深さ0.76mを測る。第39・49号溝と重複する。方位はN-71°-Eを示す。

遺物は青磁片、砥石等が検出されたが、細片が多く図示できるものがなく、所産時期は不詳である。

第73号溝 (第287・289・290・319図)

調査区中央東寄りのI-25-M-28グリッドにかけて位置する。南東から北西に直線的に延びる箱薬研堀と、それに直行する北東流する箱薬研堀からなる。調査区内において約65.8mを確認した。北東端は第43号溝に合流し、幅3.7m、深さ1.87mを測る。溝底面には土塊状に一段深く掘り込まれた部分や足場状の掘り残しが見られた。方位はN-38°-Eを示す。

遺物には形象埴輪片、古銭等がある。第319図21の古銭は腐食が著しく銭貨名は明確でないが渡来銭と考えられる。所産時期を示すような良好な遺物がなく、時期は不詳である。

第74・75号溝 (第284図)

第74・75号溝は調査区南側の西寄りのM-12・13、N-13グリッドに位置する。遺構番号は個々にふつたが、L形に配置された本来は同一の溝と考えられる。第74号溝は南西から北東へ約15.5m延び、幅0.9m、深さ0.47mを測る。方位はN-43°-Eを示す。一方、第75号溝は南東に約4.8m延び、幅0.75m、深さ0.42mを測る。方位はN-40°-Wを示す。

遺物は土師器、須恵器等がある。時期は近世に比定される。

第76号溝 (第284図)

調査区南側西寄りのM-12グリッドに位置する。西端は調査区外に延びているため全長は不明である。長さ約3.5mを確認し、幅0.6m、深さ0.73mを測る。方位はN-74°-Wを示す。

出土遺物がなく、時期は不詳である。

第77号溝 (第287・292図)

調査区中央のI-22-K-22グリッドにかけて位置する。北東から南西に向かって一直線に延びて、直角に折れ曲がり向きを南東に変える。全長約38.8m、

幅1.7m、深さ1.05mを測る。第65号溝、第8号柵列等の遺構との間に計画的な配置状況が窺われる。方位はN-47°-Eを示す。

遺物はかわらけ、瀬戸・美濃系の灰釉小皿、磁器の仏飯器、京焼系の香炉、有田産の染付碗、板石塔婆片、焙烙、磨石、貝殻等がある。第292図4の仏飯器は外面に草花文を描く。5の香炉の底裏に「清水」の刻印がある。所産時期は近世に比定される。

第78号溝 (第287・291図)

調査区中央東寄りのI-24グリッドに位置する。北東から南西に向かって約23.2m伸び、やや湾曲する。幅0.8m、深さ0.12mを測り、第45号住居跡、第79号溝と重複する。方位はN-30°-Eを示す。

遺物は、かわらけ、磁器小碗、播鉢、硯片、貝殻等が出土した。第291図1のかわらけは内外面に墨画を描く。まじない等に関連したものであろうか。2は白磁の端反小碗である。3は常滑産の播鉢である。所産時期は近世に比定される。

第79号溝 (第287・292図)

調査区中央東寄りのI-24、J-23グリッドに位置する。北西から南東に向かって約19.6m伸び、幅1.3m、深さ0.45mを測る。第49号住居跡、第78号溝と重複する。方位はN-47°-Wを示す。

遺物は周辺の遺構から流れ込んだ土師器、須恵器、埴輪の破片の他に、陶器の大鉢が出土した。第292図1は唐津産の内面に三島文を象嵌した大鉢である。所産時期は近世に比定される。

第80号溝 (第285図)

調査区中央東寄りのR-18、S-17・18グリッドに位置する。第44号墳と重複し、大きく湾曲して約10m程伸びる。北西端は第62号溝に合流し、南東端は第44号墳の周溝内で消滅していた。幅0.7m、深さ0.15mを測る。方位はN-40°-Wを示す。

遺物は土師器、埴輪、陶磁器等の破片が出土したが、図示できるものがなく所産時期は不詳である。

第81号溝 (第287図)

調査区中央東寄りのM-24・25、N-25グリッドに

位置する。北東から南西に向かって一直線に約15.5m伸びる。幅0.65m、深さ0.18mを測る幅の狭い溝で、第44号住居跡、第37号墳と重複する。配置状況から第46号溝、第8号柵列等との関連性が窺われる。方位はN-47°-Eを示す。

出土遺物には土師器、埴輪等の破片の他に、内耳鍋がある。細片のため図示できないが、所産時期は近世に比定される。

第83号溝 (第287図)

調査区中央東寄りのK-23・24グリッドに位置する。南西に約4.5m伸び、南西端の状況は擾乱により不明である。幅1.2m、深さ0.14mを測り、北東端は第52号墳と重複している。方位はN-47°-Eを示す。

出土遺物がなく、時期は不詳である。

第84号溝 (第284図)

調査区南側のK・L-14グリッドに位置し、第34・35号住居跡の北東側にあたる。全長約8.3mの幅の狭い溝で、幅0.6m、深さ0.9mを測る。方位はN-42°-Eを示す。

遺物は土師器片があるだけで、時期不詳である。

第85号溝 (第287図)

調査区中央東寄りのI-23グリッドに位置する。調査区際にあるため平面形態は明確でないが、北東からの細い溝がL形に南東に屈曲し、全長約9.5m伸びる。幅1.2m、深さ0.15mを測る。溝の走行方向からすれば、第78号溝と本来同一の溝とも考えられる。方位はN-43°-Wを示す。

出土遺物がなく、時期は不詳である。

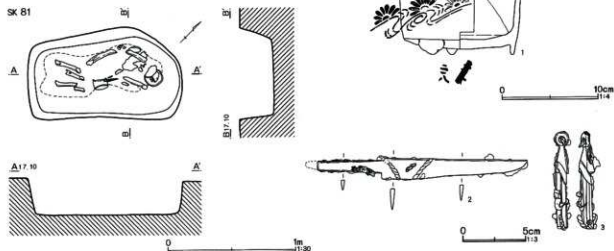
6. 土墳墓

第81号土墳 (第293図)

調査区南側東寄りのJ-16グリッドに位置する。第1号溝が中程まで埋まった段階で覆土を掘り込んで埋葬された土墳墓である。墓壇の平面形態は長方形を呈する。規模は長径1.26m、短径0.62m、深さ0.3mを測る。断面形は箱形を呈する。主軸方向はN-43°-Eを示す。

人骨の保存状態はあまり良好でなかったが、調査時

第293図 近世の土壌墓と出土遺物



第81号墓出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	香炉	12.5	7.4	12.0		A	灰白	100	底部墨書
2	刀子								長さ(16.7) 身幅1.7 棟幅0.35cm
3	簞子								長さ7.8 幅1.3cm

の観察所見から人骨の埋葬姿勢は、頭を北東に向けて仰向けに屈葬されていたことが判明した。また人骨の鑑定によれば壮年期前半の女性であると報告されている(付編参照)。副葬品は遺体の腰のあたりから香炉、刀子、簞子が出土した。

第293図1は胴部外面に型紙摺鉄絵による流水と菊花文を施した御深井軸の香炉である。底裏に「二一七」を消し、その脇に「二一八」と書いた墨書が認められる。瀬戸・美濃系の17世紀後半頃の製品と思われる。2は茎尻を一部欠損した刀子である。刀身に捻紐を巻き付けた痕跡が残る。3はいわゆる簞子である。頂部に円環の付いた傘形の頭部とピンセット部からなる。円環を通した革紐が巻き付き、ピンセット部先端には刀子と同様の捻紐が付着していた。刀子と伴出していることから佩用具の一種と考えられる。

7. 土壌

中・近世に帰属すると推定される土壌は多数検出されており、遺構番号を付したもののだけでも合計196基を数える。平面形態は円形ないし長方形を呈するものが多く、他には楕円形、矩形、不整形などが認められ

た。断面形は浅い皿状のもの、壁が直に立ち上がる箱形のもの、摺鉢状を呈するものなどがある。なお遺構図は第294・299～309図に、出土遺物は第295～298図に示した。規模等の詳細については土壌一覧表に記載したので、ここでは特に注目される土壌を中心に概要を記述することとする。

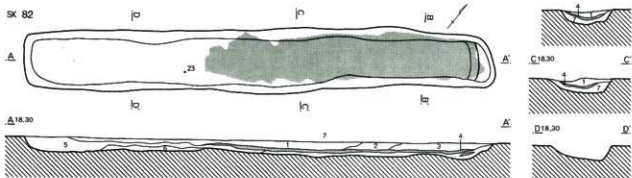
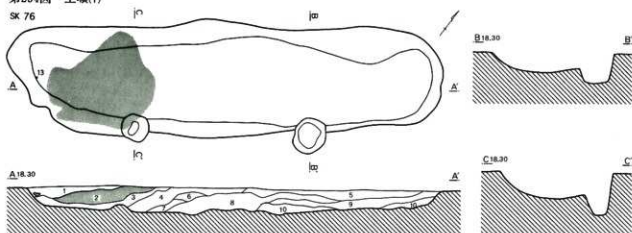
第76号土壌 (第294・295・298図)

調査区南側のK-14グリッドに位置し、北東に第82号土壌、南西に第94号土壌がほぼ一直線に並び、平面形態は長楕円形を呈し、東辺には約2.8mの間隔を置いて2本のピットが確認された。規模は長さ7 m、短径1.8m、深さ0.5mを測る。主軸方向はN-56°-Eを示す。旧遺構番号はSX6である。

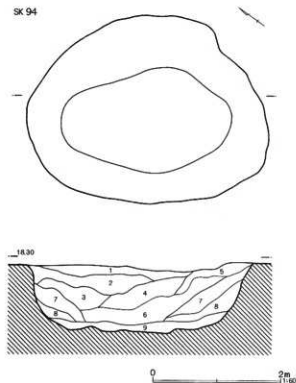
覆土は10層に区分され、第2層は焼土粒子を混入した灰白色粘土層で、1.7×1.5mの範囲に広がり、投げ込まれた状態で検出された。他の層にもローム、焼土、炭化物、粘土粒子の混入が目立つことから人為的な堆積状況が窺われた。覆土中から、かわらけ、焼塩釜の蓋、陶磁器、刀子、煙管火皿、鉄砲玉、土鈴、棒状銅製品、鉄片、鉄釘、漆碗、古銭、貝殻、骨片等の多量の遺物が出土しており、廃棄土壌の可能性が高い。

第294図 土壌(1)

SK 76



SK 94



SK 76

- 1 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子少量
- 2 灰白色粘土 焼土粒子少量
- 3 黄褐色土 ロームブロック少量
- 4 暗褐色土 ローム粒子・粘土粒子少量
- 5 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量
- 6 暗黄褐色土 炭化物粒子・粘土粒子少量
- 7 暗黄褐色土 ロームブロック少量
- 8 暗褐色土 ローム粒子・炭化物粒子多量
- 9 暗褐色土 ロームブロック・粘土粒子少量
- 10 暗黄褐色土 ロームブロック多量

SK 82

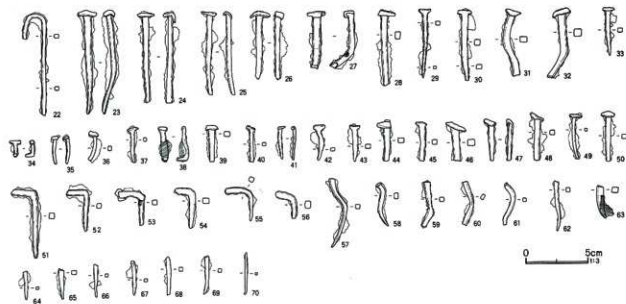
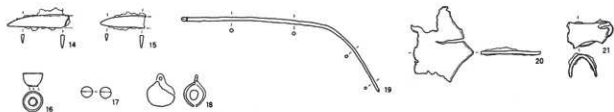
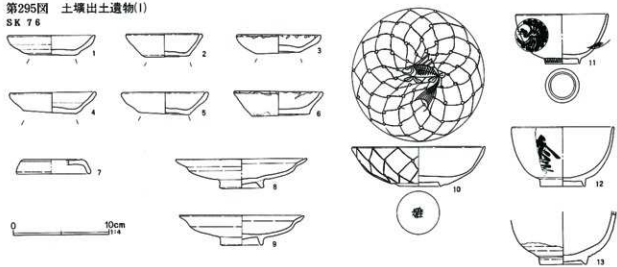
- 1 黒褐色土 炭化物粒子少量
- 2 暗黄褐色土 ロームブロック多量
- 3 暗黄褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量
- 4 灰白色粘土 焼土粒子少量
- 5 灰褐色土 ローム粒子・粘土粒子多量
- 6 黄褐色土 ロームブロック多量
- 7 灰褐色土 ローム粒子・粘土粒子少量

SK 94

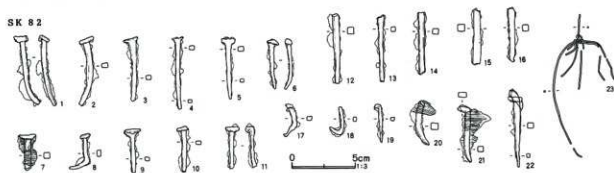
- 1 暗灰褐色土 ローム粒子・粘土粒子多量
- 2 暗褐色土 炭化物粒子・粘土粒子多量
- 3 暗褐色土 ローム粒子・炭化物粒子・粘土粒子少量
- 4 暗褐色土 ローム粒子・粘土粒子・礫少量
- 5 暗褐色土 ローム粒子・炭化物粒子・粘土粒子多量
- 6 暗灰褐色土 炭化物粒子・粘土粒子・礫多量
- 7 灰褐色土 粘土粒子多量
- 8 暗褐色土 ローム粒子多量
- 9 暗黄褐色土 ロームブロック多量

第295図 土壇出土遺物(1)

SK 76

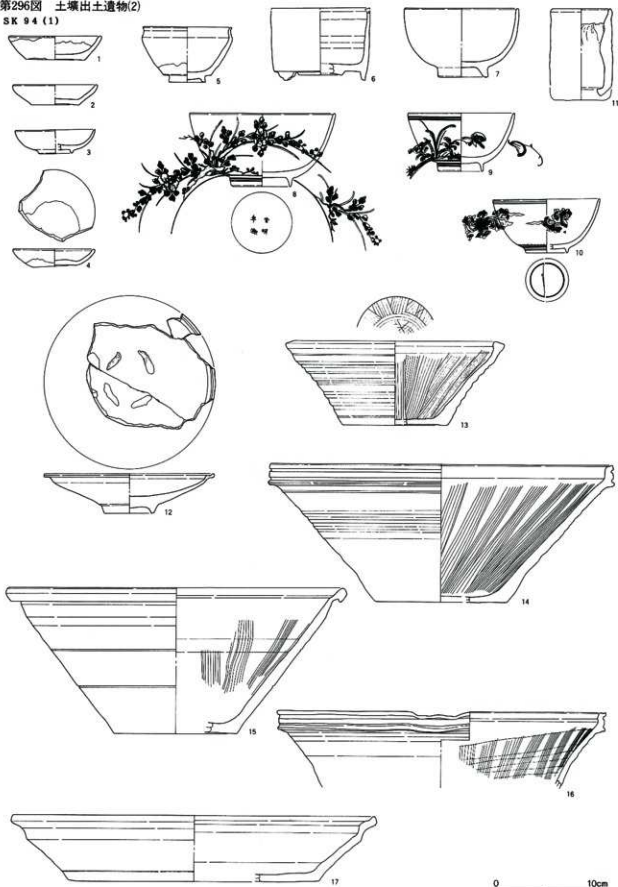


SK 82



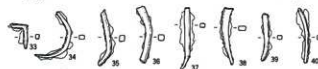
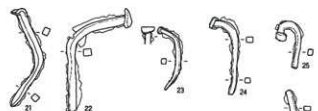
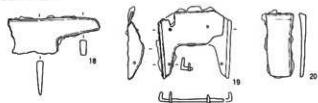
第296図 土壇出土遺物(2)

SK 94 (1)

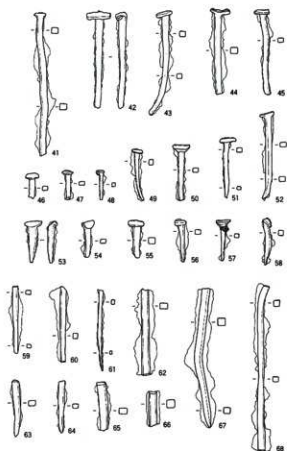


第297図 土壌出土遺物(3)

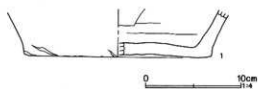
SK 94 (2)



0 5cm
113



SK 42



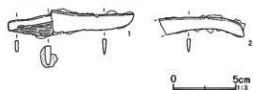
0 10cm
114

SK 67



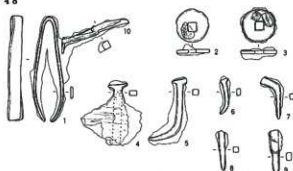
0 10cm
114

SK 195

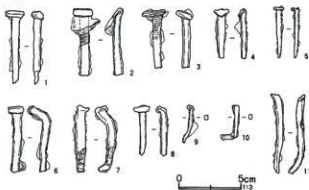


0 5cm
113

SK 48



SK 166



0 5cm
113

土曜出土遺物観察表

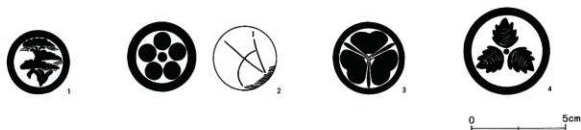
遺構	番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
SK-76	1	かわらけ	8.9	2.1	4.9	BEF	A	浅黄橙	70	
	2	かわらけ	7.9	2.4	4.7	BEF	A	にぶい橙	100	
	3	かわらけ	8.7	1.9	4.7	EF	B	淡黄	100	口縁部内外面油煙付着
	4	かわらけ	8.9	2.1	5.6	BEF	A	浅黄橙	60	
	5	かわらけ	8.6	2.3	5.1	BEF	A	浅黄橙	100	
	6	かわらけ	9.2	2.5	6.0	BEF	C	にぶい橙	100	口縁部内外面、体部内面に油煙付着
	7	焼塩釜蓋	(7.6)	1.5		BEF	A	にぶい橙	15	
	8	皿	(13.7)	3.1	4.6		A		60	
	9	皿	13.0	3.6	4.5		A		95	
	10	皿	14.0	4.1	4.4		A		80	鳥須
	11	丸碗	(9.6)	5.2	5.6		A		40	鳥須
	12	丸碗	(10.6)	6.2	4.6		A		30	
	13	天日茶碗		(5.5)	4.9		A		40	
	14	刀子								長さ(5.0) 身幅1.0 棟幅0.3cm
	15	刀子								長さ(3.6) 身幅1.0 棟幅0.3cm
	16	キセル								縦1.1 横1.55cm
	17	鉄砲玉								径0.9cm
	18	土鈴								縦2.55 横2.85cm
	19	棒状銅製品								長さ18.4 幅0.35cm
	20	不明鉄片								長さ4.8 幅5.9 厚さ0.3cm
	21	不明鉄片								長さ2.1 幅3.5 厚さ0.3cm
	22	釘								長さ10.4 幅0.4cm
	23	釘								長さ8.2 幅0.6cm
	24	釘								長さ(7.1) 幅0.5cm
	25	釘								長さ(6.5) 幅0.45cm
	26	釘								長さ(3.1) 幅0.35cm
	27	釘								長さ(5.1) 幅0.7cm
	28	釘								長さ(6.1) 幅0.5cm
	29	釘								長さ5.4 幅0.4cm
	30	釘								長さ(5.6) 幅0.6cm
	31	釘								長さ(5.4) 幅0.6cm
	32	釘								長さ(5.5) 幅0.6cm
	33	釘								長さ3.85 幅0.45cm
	34	釘								長さ(2.0) 幅0.25cm
	35	釘								長さ2.2 幅0.3cm
	36	釘								長さ(2.4) 幅0.3cm
	37	釘								長さ(3.4) 幅0.5cm
	38	釘								長さ(3.2) 幅0.55cm
	39	釘								長さ(2.9) 幅0.5cm
	40	釘								長さ(2.9) 幅0.3cm
	41	釘								長さ(2.8) 幅0.3cm
	42	釘								長さ(2.9) 幅0.45cm
	43	釘								長さ(2.3) 幅0.4cm
	44	釘								長さ(3.15) 幅0.5cm
	45	釘								長さ(3.1) 幅0.5cm
	46	釘								長さ(3.1) 幅0.6cm
	47	釘								長さ(3.3) 幅0.5cm
	48	釘								長さ(3.4) 幅0.5cm
	49	釘								長さ(3.5) 幅0.25cm
	50	釘								長さ(4.0) 幅0.45cm
	51	釘								長さ(6.6) 幅0.6cm
	52	釘								長さ(4.9) 幅0.5cm
	53	釘								長さ(4.9) 幅0.6cm
	54	釘								長さ(4.5) 幅0.55cm

遺構	番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
SK-76	55	釘								長さ(4.5) 幅0.45cm
	56	釘								長さ(3.3) 幅0.55cm
	57	釘								長さ(6.0) 幅0.5cm
	58	釘								長さ(3.7) 幅0.4cm
	59	釘								長さ(4.1) 幅0.5cm
	60	釘								長さ(3.5) 幅0.45cm
	61	釘								長さ(3.7) 幅0.5cm
	62	釘								長さ(4.1) 幅0.35cm
	63	釘								長さ(2.8) 幅0.6cm
	64	釘								長さ(2.2) 幅0.3cm
	65	釘								長さ(2.8) 幅0.6cm
	66	釘								長さ(2.6) 幅0.3cm
	67	釘								長さ(2.8) 幅0.3cm
	68	釘								長さ(3.1) 幅0.3cm
69	釘								長さ(3.1) 幅0.35cm	
70	釘								長さ(3.4) 幅0.2cm	
SK-82	1	釘								長さ(5.6) 幅0.4cm
	2	釘								長さ(5.6) 幅0.6cm
	3	釘								長さ(5.0) 幅0.6cm
	4	釘								長さ(5.8) 幅0.45cm
	5	釘								長さ(4.85) 幅0.5cm
	6	釘								長さ(4.1) 幅0.4cm
	7	釘								長さ(2.9) 幅0.5cm
	8	釘								長さ4.0 幅0.35cm
	9	釘								長さ(3.5) 幅0.35cm
	10	釘								長さ(3.5) 幅0.4cm
	11	釘								長さ(3.3) 幅0.45cm
	12	釘								長さ(5.5) 幅0.55cm
	13	釘								長さ(5.5) 幅0.5cm
	14	釘								長さ(4.9) 幅0.55cm
15	釘								長さ(4.4) 幅0.65cm	
16	釘								長さ(4.4) 幅0.55cm	
17	釘								長さ(2.8) 幅0.45cm	
18	釘								長さ(3.3) 幅0.25cm	
19	釘								長さ(3.4) 幅0.3cm	
20	釘								長さ(3.7) 幅0.5cm	
21	釘								長さ(4.9) 幅0.4cm	
22	釘								長さ(6.2) 幅0.55cm	
23	銅線									長さ(14.3)cm
SK-94	1	かわらけ	(9.6)	2.4	(6.2)	BEF	D	浅黄橙	80	
	2	かわらけ	(8.6)	2.1	(5.0)	BEF	A	浅黄橙	60	
	3	皿	(8.4)	2.4	(3.4)		A	にぶい橙	50	
	4	かわらけ	(8.4)	(1.8)	(4.6)	BEF	B	浅黄橙	55	
	5	天目茶碗	(9.2)	5.8	(3.8)		A		40	瀬川系
	6	香炉		(7.3)	(9.7)		A	灰白	25	
	7	碗	(11.9)	7.2	5.0		A	にぶい橙	30	
	8	碗	15.3	7.7	6.0		A		98	
	9	碗	11.2	6.1	4.8		A		98	呉須
	10	丸碗	11.2	5.7	4.2		A		20	
	11	烧塩壺	(6.2)	(9.1)		ABEF	B	橙	25	
	12	皿	(17.8)	(4.2)	5.2				40	
	13	播鉢	(23.2)	8.8	(11.1)		A	オリーブ灰	15	
	14	播鉢	(36.2)	14.5	14.1	ABE	B	にぶい赤褐	20	
	15	播鉢	(35.4)	15.4	(13.0)	BE	B	淡黄	30	

造構	番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考	
SK-94	16	摺鉢	(34.8)	(8.1)		A B E	C	にぶい赤褐	10		
	17	摺鉢	(38.2)		7.0 (26.7)	A B E F	A	にぶい赤褐	5		
	18	刀子								長さ(7.4) 身幅2.8 棟幅0.5cm	
	19	飾金具								長さ5.3 幅6.0cm	
	20	撥?								長さ5.0 幅2.3 厚さ0.5cm	
	21	釘								長さ(8.9) 幅0.75cm	
	22	釘								長さ(10.5) 幅0.75cm	
	23	釘								長さ(5.7) 幅0.45cm	
	24	釘								長さ(7.0) 幅0.7cm	
	25	釘								長さ(6.2) 幅0.5cm	
	26	釘								長さ(4.0) 幅0.45cm	
	27	釘								長さ(3.2) 幅0.3cm	
	28	釘								長さ(4.6) 幅0.5cm	
	29	釘								長さ(2.7) 幅0.35cm	
	30	釘								長さ(3.9) 幅0.5cm	
	31	釘								長さ(4.7) 幅0.35cm	
	32	釘								長さ(10.3) 幅0.55cm	
	33	釘								長さ(2.8) 幅0.35cm	
	34	釘								長さ(6.0) 幅0.4cm	
	35	釘								長さ(4.7) 幅0.4cm	
	36	釘								長さ(4.5) 幅0.65cm	
	37	釘								長さ(5.1) 幅0.45cm	
	38	釘								長さ(4.6) 幅0.65cm	
	39	釘								長さ(3.8) 幅0.5cm	
	40	釘								長さ(4.5) 幅0.35cm	
	41	釘								長さ(11.3) 幅0.6cm	
	42	釘								長さ(7.2) 幅0.65cm	
	43	釘								長さ(8.5) 幅0.55cm	
	44	釘								長さ(6.7) 幅0.75cm	
	45	釘								長さ(6.8) 幅0.5cm	
	46	釘								長さ(2.1) 幅0.45cm	
	47	釘								長さ(2.3) 幅0.4cm	
	48	釘								長さ(2.3) 幅0.3cm	
	49	釘								長さ(4.1) 幅0.4cm	
	50	釘								長さ(4.4) 幅0.5cm	
	51	釘								長さ(4.8) 幅0.45cm	
	52	釘								長さ(6.9) 幅0.55cm	
	53	釘								長さ(3.5) 幅0.75cm	
	54	釘								長さ(3.0) 幅0.55cm	
	55	釘								長さ(3.0) 幅0.65cm	
	56	釘								長さ(3.3) 幅0.55cm	
	57	釘								長さ(3.2) 幅0.4cm	
	58	釘								長さ(3.8) 幅0.5cm	
	59	釘								長さ(5.3) 幅0.45cm	
	60	釘								長さ(6.0) 幅0.55cm	
	61	釘								長さ6.4 幅0.35cm	
	62	釘								長さ(6.8) 幅0.65cm	
	63	釘								長さ(4.6) 幅0.6cm	
	64	釘								長さ(4.6) 幅0.65cm	
	65	釘								長さ(3.9) 幅0.8cm	
	66	釘								長さ(2.7) 幅0.65cm	
	67	釘								長さ(11.2) 幅0.7cm	
	68	釘								長さ(13.4) 幅0.55cm	
	SK-42	1	甕		(5.0)	19.8	A B J	B	橙	10	

遺構	番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
SK-48	1	毛抜き								長さ8.3 幅1.0cm
	2	古銭								径2.6cm
	3	古銭								径2.7cm
	4	釘								長さ(0.6) 幅0.6cm
	5	釘								長さ6.8 幅0.55cm
	6	釘								長さ3.1 幅0.4cm
	7	釘								長さ3.9 幅0.65cm
	8	釘								長さ(3.2) 幅0.5cm
	9	釘								長さ(3.4) 幅0.65cm
SK-67	1	坏		(3.2)	(6.4)	ABF	A	灰	40	
	2	坏		(1.4)	5.9	ABFG	D	にぶい黄橙	30	
SK-166	1	釘								長さ(6.8) 幅0.7cm
	2	釘								長さ(5.3) 幅0.7cm
	3	釘								長さ(4.46) 幅0.7cm
	4	釘								長さ(3.9) 幅0.65cm
	5	釘								長さ(4.0) 幅0.45cm
	6	釘								長さ(6.0) 幅0.85cm
	7	釘								長さ(5.9) 幅0.85cm
	8	釘								長さ(4.0) 幅0.55cm
	9	釘								長さ(3.1) 幅0.4cm
	10	釘								長さ(2.7) 幅0.4cm
	11	釘								長さ(6.5) 幅0.6cm
SK-195	1	刀子								長さ10.0 身幅1.80 棟幅0.5cm
	2	刀子								長さ(6.8) 身幅1.3 棟幅0.25cm

第298図 第76号土壌出土漆碗の家紋



第295図1～6はかわらけて、3・6の口縁部には油煙が付着しており灯明皿として使用されていたものと考えられる。7は焼塩壺の蓋である。8・9は青磁皿である。見込に蛇の目状の釉剥ぎを施したもので、釉剥ぎ部分に重ね焼き痕が残る。10は磁器皿で、内面に呉須染付により網目文と魚を描き、外面には網目文を描く。底裏に「雅」を呉須により手書きしている。貿易磁器と考えられる。11は呉須染付の丸碗で外面に鶴の文様をコンニャク印判によって施文する。12は唐津系の京焼写しの丸碗で外面に山水風景文を描き、底裏面には「雲」銘の刻印がある。13は瀬戸・美濃系の

鉄釉天目茶碗である。

14・15は刀子の切先部分の破片である。16は煙管の火皿。17は鉛製鉄砲玉。18は土鈴の破片で、丸も土製である。19は火箸あるいは芯つまみなどに使用したと思われる銅製の棒状製品である。頭部は一段にくびれ、蕾状を呈する。胴部は断面円形で、僅かに屈曲し先端部は尖る。20・21は不明鉄片である。22～70は鉄釘を一括した。頭部が丸く折り返された頭巻釘である。

また漆膜だけとなった漆碗の破片が少なくとも4個体確認でき、第298図に文様のみを図示した。表面は黒漆、裏面は赤漆を塗布したものであり、確認

された文様には紋章(家紋)が多い。1は碗の外面3か所に銀色で丸に三層松が描かれている。2は碗蓋と思われる破片の外面に朱色で丸に梅鉢文を描き、つまみ内にすきのような草文を描く。3は外面に朱色で丸に剣片喰文が描かれている。4は外面に朱色で丸に三つ柏が描かれている。古銭は第319図13の文銭が出土している。

貝類にはサザエ、アワビ、アカガイ、ハイガイ、マキガイ、ハマグリ、シジミ等の種類が認められ、サザエが最も多い。他に骨片が1点出土しているが、種類は不明である。

第82号土壌 (第294・295図)

調査区南側のL-15グリッドに位置し、南西に約5mの距離において第94号土壌が所在する。また南東側には第4号掘立柱建物跡が隣接する。平面形態は溝状の長方形を呈する。規模は長径7.55m、短径1.05m、深さ0.35mを測る。主軸方向はN-49°-Eを示す。旧遺構番号はSX7である。

覆土は7層に分けられる。第4層は焼土粒子を混入した灰白色粘土層で、土壌の北側を中心に薄く堆積していた。これは調査の所見では人為的に粘土を底面に貼ったものと考えられる。遺物は覆土上層を中心に鉄釘、銅線(束状の針金)、貝殻等が検出された。

第295図1~22は鉄釘である。断面が方形ないし長方形を呈し、頭部は「J」状に折り曲げられ、正面観はT字状をなす和釘である。太さや長さなどの違いから3~4種類程に細分され、使用目的の違いにより使い分けられたのであろう。23は直径約1mmの銅線4本を撻り合わせたもので、用途は不明である。出土した貝類にはサザエ、アワビ等の種類が認められた。

第94号土壌 (第294・296・297図)

調査区南側のK-14グリッドに位置し、北東へ約2mの間隔において第76号土壌がある。平面形態は不整形円形を呈し、規模は長径4.02m、短径3.02m、深さ1.15mを測る。主軸方向はN-47°-Eを示す。旧遺構番号はSX5である。

覆土は大きく9層に分かれ、第6層には多量の礫が

投げ捨てられていた。他の層にはローム、炭化物、粘土粒子の混入が目立ち、人為的な埋没状況が窺われた。覆土の上層を中心に多量のかわけ、陶磁器、播鉢、包丁、鉄製飾金具、鉄釘、煙管吸口、貝殻等が出土しており、いわゆる廃棄土壌と考えられる。

第296・297図1~68に出土遺物を一括した。1・2・4は灯明皿で、1・4の口縁部内外面には油煙が厚く付着する。3は伊万里産の皿である。5は瀬戸・美濃系のやや小振りの天目茶碗である。17世紀後半頃の製品と考えられる。6は香炉。7は丸碗で、貫入が見られる。8~10は伊万里産と考えられる染付の丸碗である。8はやや大振りの丸碗で、外面に草花文を呉須で描き、底裏面に「宣明年製」銘が手書きされている。9は外面に圏線及び草花文を染付けする。10は外面に圏線を描き、コンニャク印判の文様を施文する。底裏には圏線を描き銘を入れる。11は焼塩壺である。残存部には刻印は見られない。12は唐津産の陶器皿である。見込部分には4か所に砂目が残る。長石釉。13~16は播鉢である。13は7条一単位の播目で、見込に同心円状の播目を施す。16は口縁を外に押し広げたような注口が見られる。17は丹羽産の盤である。

18は菜切り包丁と考えられる。19は鉄製の飾金具である。一部欠損しているが、鉄板を凹形に加工し、その両端を折り曲げたもので、4か所程に鉄を打ち込んで固定している。20は楔状の鉄製品である。21~68は鉄釘を一括した。頭部が丸く折り返された頭巻釘が多い。他に、煙管の吸口が2点出土している。

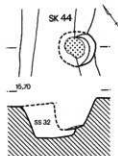
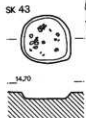
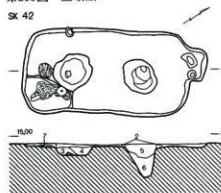
貝類にはサザエ、アカガイ等の種類が認められ、サザエはかなりまとまった量が出土した。

第42号土壌 (第297・299図)

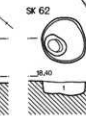
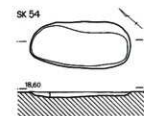
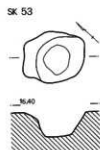
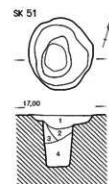
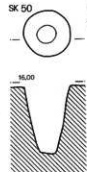
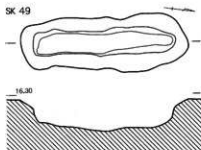
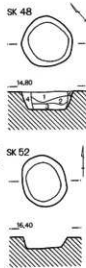
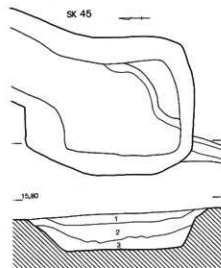
調査区北側のV-28、W-28・29グリッドに位置し、第24号墳の墳丘部分に重複する。平面形態は長方形を呈し、北辺には張り出し部がある。規模は長径3.92m、短径1.8m、深さ0.72mを測り、底面には中軸線上に2本のビットが検出され、南東隅の底面には炭化物が分布していた。主軸方向はN-32°-Eを示す。遺物は南側のビット底面から第297図の常滑産の甕が

第299図 土曜(2)

SK 42



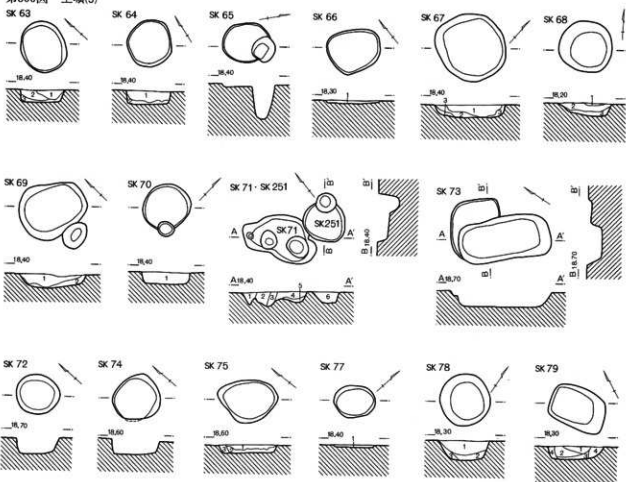
赤酸化部分



- SK 42
- 1 暗褐色土 ローム粒子少量
 - 2 暗褐色土 ロームブロック少量
 - 3 暗褐色土 ローム粒子多量
 - 4 暗褐色土 ロームブロック・焼土粒子少量
 - 5 暗褐色土 ロームブロック多量
 - 6 黄褐色土 ロームブロック・暗褐色土少量
 - 7 暗黒褐色土 炭化物多量
- SK 45
- 1 暗褐色土 ローム粒子少量
 - 2 暗褐色土 ローム粒子多量
 - 3 黄褐色土 ロームブロック・褐色土少量
- SK 48
- 1 暗褐色土 浅間A粒子・ローム粒子多量
 - 2 灰褐色土 浅間A粒子・ローム粒子少量
 - 3 暗灰褐色土 浅間A粒子・ローム粒子少量
 - 4 黄褐色土 ロームブロック・褐色土多量
- SK 51
- 1 褐色土 浅間A粒子・ロームブロック多量
 - 2 暗褐色土 浅間A粒子・ロームブロック少量
 - 3 暗黄褐色土 ロームブロック・暗褐色土少量
 - 4 暗褐色土 ロームブロック多量
- SK 54
- 1 黒褐色土 ロームブロック多量
- SK 60
- 1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子やや多量
 - 2 黒褐色土 ローム粒子少量
- SK 61・62
- 1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子やや多量

0 2m
1:80

第300図 土塚(3)



SK 63

- 1 暗褐色土 ローム粒子やや多量
- 2 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子やや多量
- 3 黒褐色土 ローム粒子少量

SK 64

- 1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子やや多量
- 2 黒褐色土 ローム粒子少量

SK 66

- 1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子やや多量

SK 67

- 1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子やや多量
- 2 黒褐色土 ローム粒子少量
- 3 暗褐色土 ロームブロック多量

SK 68

- 1 暗黄褐色土 ローム粒子少量・焼土粒子多量
- 2 暗褐色土
- 3 褐色土 ロームブロック・ローム粒子やや多量

SK 69

- 1 黒褐色土 ローム粒子少量
- 2 暗褐色土 ロームブロック多量

SK 70

- 1 黒褐色土 ロームブロック・ローム粒子やや多量

SK 71・251

- 1 暗褐色土 ロームブロック多量・ローム粒子少量
- 2 黒褐色土 ロームブロック少量・ローム粒子多量
- 3 黒褐色土 ローム粒子多量
- 4 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子少量
- 5 褐色土 ロームブロック多量
- 6 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子やや多量

SK 75

- 1 黒褐色土 ロームブロック・ローム粒子少量
- 2 明褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量
- 3 暗褐色土 ローム粒子少量

SK 77

- 1 黒褐色土 ローム粒子少量

SK 78

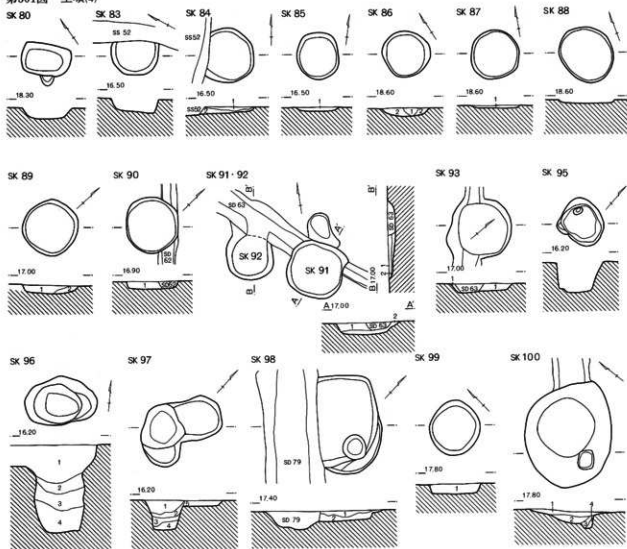
- 1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子少量
- 2 黒褐色土 ロームブロック・ローム粒子少量
- 3 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量

SK 79

- 1 暗褐色土 ローム粒子・灰褐色粒子多量
- 2 灰褐色土 灰褐色ブロック・ローム粒子少量
- 3 暗灰褐色土 灰褐色ブロック・ローム粒子少量
- 4 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子・黒褐色土少量



第301図 土壌(4)

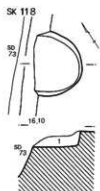
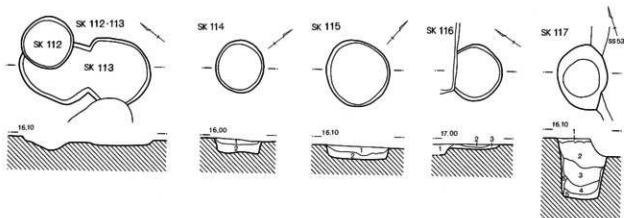
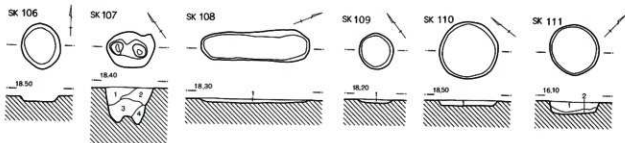
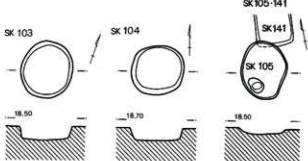
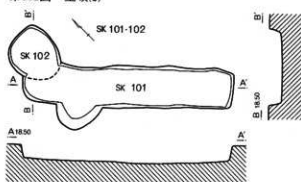


- SK 84
 1 暗褐色土 ローム粒子多量
 2 黒褐色土 ロームブロック少量、ローム粒子多量
- SK 85
 1 暗褐色土 ローム粒子多量
- SK 86
 1 暗褐色土 灰色ブロック・ローム粒子多量
 2 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量
- SK 87
 1 黒褐色土 ローム粒子少量
- SK 89
 1 黒褐色土 ロームブロック少量
 2 暗褐色土 ロームブロック多量
- SK 90
 1 黒褐色土 ロームブロック少量
- SK 91・92
 1 暗褐色土 ロームブロック少量、ローム粒子多量
 2 黒褐色土 ロームブロック少量
- SK 93
 1 暗褐色土 ロームブロック少量、ローム粒子多量

- SK 96
 1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子少量
 2 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量
 3 暗褐色土 ロームブロック多量
 4 暗褐色土 ローム粒子少量
- SK 97
 1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子少量
 2 暗褐色土 ロームブロック多量
 3 黄褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量
 4 暗黄褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量
 5 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量
- SK 98
 1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子少量
 2 黒褐色土 ロームブロック少量、ローム粒子やや多量
- SK 99
 1 黒褐色土 ロームブロック・ローム粒子少量
- SK 100
 1 黒褐色土 ロームブロック・ローム粒子やや多量
 2 黒褐色土 ロームブロック少量
 3 暗褐色土 ロームブロック少量
 4 褐色土 ロームブロック多量

0 2m

第302図 土壇(5)

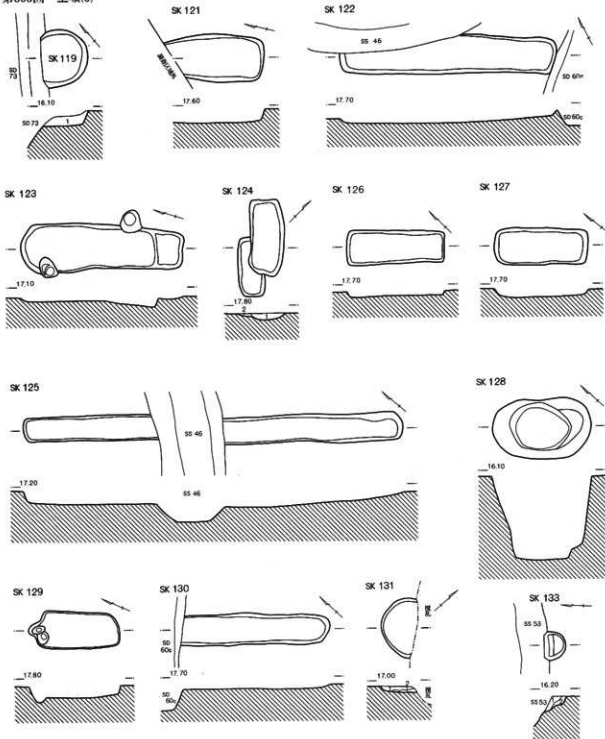


- SK 107
 1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量
 2 黒褐色土 ロームブロック・ローム粒子少量
 3 暗褐色土 ローム粒子多量
 4 暗褐色土 ロームブロック多量
- SK 108・109
 1 暗褐色土 ロームブロック少量
- SK 110
 1 明褐色土 ロームブロック・暗褐色ブロック少量
- SK 111
 1 暗褐色土 褐色ブロック・ローム粒子少量
 2 暗褐色土 ローム粒子少量
- SK 114
 1 暗褐色土 ローム粒子多量
 2 暗黄褐色土 ロームブロック・ローム粒子少量

- SK 115
 1 黒褐色土 ロームブロック・ローム粒子やや多量
 2 黒褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量
- SK 116
 1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子
 2 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子少量
 3 暗黄褐色土 ロームブロック・ローム粒子
- SK 117
 1 暗黄褐色土 ローム粒子やや多量
 2 黒褐色土 ローム粒子少量
 3 黒褐色土 ロームブロック少量
 4 黒褐色土 ローム粒子多量
 5 暗黄褐色土 ロームブロック多量
 6 暗褐色土 ロームブロック多量
- SK 118
 1 黒褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量

0 2m
1:30

第303図 土壇(6)



SK 119

- 1 黒褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量

SK 120

- 1 黒褐色土 ローム粒子少量
2 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子やや多量
3 黒褐色土 ローム粒子多量

SK 124

- 1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子少量
2 暗褐色土 ローム粒子・灰褐色土・黒褐色土少量

SK 131

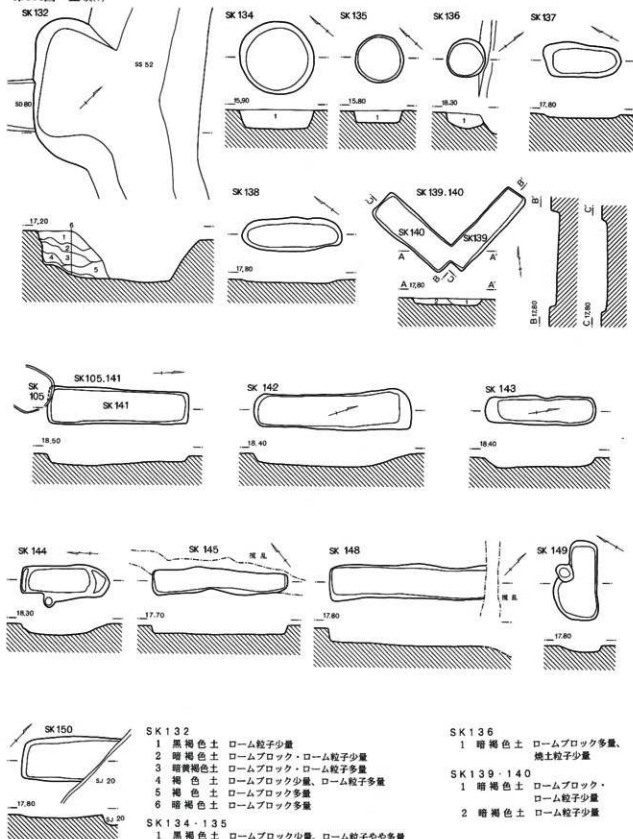
- 1 褐色土 ローム粒子多量
2 黒褐色土 ローム粒子やや多量

SK 133

- 1 黒褐色土 ローム粒子やや多量
2 暗黄褐色土 ローム粒子少量

0 2m
1/80

第304図 土坑(7)



0 2m 1:80